

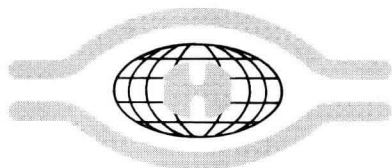
HEIBON
SHA'S
WORLD
ENCYCLO
PEDIA

世界
大百科
事典

15

ショーシワ

平凡社



世界大百科事典 15

1981年4月20日 初版発行
1982年印刷
全36巻揃現金定価 145,000円

編集兼発行人 下中邦彦
発行所 平凡社
郵便番号102
東京都千代田区三番町5
振替東京8-29639番
電話03(265)0451番

本文用紙 十条製紙株式会社
グラビア用紙 山陽国策パルプ株式会社
多色オフ 見返用紙 日清紡績株式会社

本文写植製版 フォト印刷株式会社
本文印刷 株式会社東京印書館
グラビア製版印刷 株式会社東京印書館
多色オフ 株式会社光村原色版印刷所

クロス ダイニック株式会社
表紙箔押 斎藤商会
製本 和田製本工業株式会社

© 株式会社平凡社 1981 Printed in Japan

●見出しのつけ方●

《表音見出し》

1. 日本読みのものは〈現代かなづかい〉による〈ひらがな〉書きとし、促音・拗音は小字とした。ただし、お列長音は〈う〉、〈ち・づ〉は〈じ・ず〉とした。
2. 外国読みのものは、外来語を含めて〈カタカナ〉書きとし、長音は〈音びき〉(一)を用いた。略語は、とくに原語読みの普及しているもののほかは英語読みに従った。
3. 中国・朝鮮などの人名・地名は、慣用の漢字読みで出したが、現地読みに近い慣用読みのあるものはそれによった。
4. 日本語と外来語との合成語は、日本語の部分は〈ひらがな〉、その他は〈カタカナ〉とした。

《本見出し》

1. 日本読みのものは、〈漢字〉と〈ひらがな〉を用いた。〈ひらがな〉書きのもので、表音見出しとまったく一致するものは省略した。
2. 外国読みの項目には、原則として原語(あるいは語原を示す語)を入れた。ただし、ギリシア語、ロシア語その他、特殊な文字のものはローマ字におきかえて入れた。
3. 日本読みと外国読みとの合成したもの、〈漢字〉〈ひらがな〉〈カタカナ〉をあわせ用いた。

《項目配列の方法》

1. 表音見出しの五十音順とし、促音・拗音も音順にかなぞえ、清音、濁音、半濁音の順序とした。
2. 〈音びき〉(一)のあるものは〈音びき〉のないものの後にした。
3. 同音のものは、おおよそつぎのような順序で配列した。
 - a. 表音見出しの〈カタカナ〉→〈ひらがな〉。
 - b. 本見出しのないもの→〈カタカナ〉のもの→〈ひらがな〉のもの→漢字のもの。
 - c. 本見出しが漢字のものは、第1字目の画数の少ないものを先にし、第1字目が同字のものは順次第2字以降の画数による。
 - d. 同音同字のものでは、普通名詞→固有名詞。
 - e. 外国人名では、ファミリー・ネーム(同一の場合はパーソナル・ネーム)のアルファベット順。
 - f. 日本地名では、自然地名→行政地名→その他の地名。

●文体と用語・用字●

1. 漢字まじり〈ひらがな〉口語文とし、かなづかいはおおむね〈現代かなづかい〉に従い、漢字は原則として当用漢字を用いた。ただし、原典の引用、固有名詞、歴史的用語その他は例外として扱い、必要に応じて()内に読みがなをつけた。
2. 動・植物名、元素名、化合物名、鉱物名で当用漢字のないもの、日本神名および〈カタカナ〉を慣用としている特殊の語は〈カタカナ〉書きとした。
3. 年代は、原則として西洋紀年を用い、必要に応じて日本・中国その他の暦年をつけた。
4. 度量衡は、原則としてメートル法を用いたが、慣用に従って尺貫法、ヤード・ポンド法を用いた場合もある。

●外国語について●

1. 欧文の地名・人名については、可能なかぎり現地読みに近いものをとったが、慣用の読み方に従って例外としたものも少なくない。
2. ギリシア語、ロシア語のローマ字へのおきかえはつぎのようにした。
 - a. ギリシア語
η=e ω=o χ=k χ=ch
 - b. ロシア語
а=a б=b в=v г=g д=d
е=e ё=yo ж=zh з=z и=i
й=i к=k л=l м=m н=n
о=o п=p р=r с=s т=t
у=u ф=f х=kh ц=ts ч=ch
ш=sh щ=shch ъ=' ы=y
ь=' э=e ю=yu я=ya
3. 上記のほか、欧文の地名・人名の〈カタカナ〉による表記は、おおむねつぎの基準に従った。

berg[スウェーデン]〈ベリー〉 Strindberg ストリンドベリー

cu[スペイン]〈クァ・クィ・クェ・クォ〉 Ecuador エクアドル

d[独]語末では〈ト〉 Wieland ヴィーラント

de[仏]〈ド〉 de Gaulle ド・ゴール

dou[仏]〈ドゥー〉 Doumer ドゥーメル

du[英・仏]〈デュ〉 Durand デュラン

ド; Dumas デュマ

du[独]〈ドゥ〉 Durst ドゥルスト

er[英・独]語末では〈アー〉 Parker パーカー; Herder ヘルダー

g[独]語末では〈ク〉, ngは〈ング〉, igは〈イヒ〉 Hamburg ハンブルク; Lessing レッセング; König ケーニヒ

gn[仏・伊・スペイン]〈ニャ・ニュ・ニエ・ニョ〉 Auvergne オーヴェルニュ; Bologna ボローニャ

gu[伊・スペイン]〈グァ・グィ・グェ・グォ〉 Paraguai パラグアイ

ia[一般]語末では〈イア〉 Asia アジア

io[伊]〈ヨ〉(拗音) Boccaccio ボッカッチョ; Giorgione ジョルジョーネ

j[スペイン]〈ハ行音〉 Juárez フアレス

je[一般]〈イェ〉 Jena イェーナ

ley[英]〈リー〉 Huxley ハクスリー

ll[スペイン]〈リャ・リョ〉, 南アメリカでは〈ヤ・ヨ〉 Castilla カスティリャ; Trujillo トルヒョ

oi, oy[仏]〈オワ〉 Boileau ボワロー

pf[独]〈プ〉 Pfitzner プィッツナー

ph[ギリシア]〈フ〉 Aristophanes アリストファネス

qu[伊・ラテン]〈クァ・クィ・クェ・クォ〉 Quirinius クィリニウス

ray[英]〈レー〉 Thackeray サッカレー

son[英]〈ソン〉 Edison エディソン

sp, st[独]語頭では〈シュブ・シュト〉 Spranger シュブランガー; Storm シュトルム

stew, stu[英]〈スチュ〉 Stewart スチュアート; Stuart スチュアート

swi[英]〈スウィ〉 Swift スウィフト

thi, ti[一般]〈ティ〉 Thiers ティエール; Tiziano ティツィアーノ

thu, tu[独・ラテン]〈トゥ〉 Tum-lirz トゥムリルツ; Tacitus タキトゥス

thü, tü[独]〈チュ〉 Thürnau チュルナウ

tou[仏]〈トゥー〉 Toulon トゥーロン

tu[英・仏]〈チュ〉 Tunisia チュニジア

v[ラテン]〈ウ〉 Vergilius ウェルギリウス

v[スペイン]〈バ行音〉 Verasquez ベラスケス

w[独]〈ヴ〉 Wagner ヴァーグナー

x[一般]〈クス〉 Xenophon クセノフオン

y[ギリシア]〈ユ〉(拗音) Dionysos デイオニッソス

zi[独]〈チ〉 Leipzig ライプチヒ; ただし語頭では〈ツィ〉 Zimmermann ツィンマーマン

zi[伊]〈ツィ〉 Venezia ヴェネツィア

zü[独]〈チュ〉 Zürich チューリヒ

●符号・記号●

《かこみと送り》

- 【 】 中見出し語をかこむ。
- 〔 〕 〈本見出し〉に出る動・植物の漢字および本文中の小見出し語をかこむ。
- 《 》 書名または題名をかこむ。

- く > 引用文または語句，とくに注意を
うながす語，書名または題名以外
の編または章などの表題をかこむ。
() 注の類，または読みがなをかこむ。
[] 日本地名の国・県・区・市・町・
村をかこむ。
⇒ 該当項目への送り
↪ 参照項目への送り

《漢字略語》

国名・地名の略語を用いる場合は，つぎ
の13種にかぎって使用する。

アメリカ(米)；イギリス(英)；イタリ
ア(伊)；インド(印)；オーストラリア
(豪)；オランダ(蘭)；ソヴェト(ソ)；
中国(中)；ドイツ(独)；日本(日)；フ
ランス(仏)；モンゴル(蒙)；ヨーロッ
パ(欧)

ただし，戦争，会議，協定など特定の場
合にかぎって

アジア(亜)；アフリカ(阿)；オースト
リア(澳)；トルコ(土)；プロイセン
(普)；ロシア(露)

などの略語も用いる。

《科学記号または略符号》

a	アール
A	アンペア
Å	オングストローム (=10 ⁻⁷ mm)
A. D.	紀元後
atm	気圧
Aufl.	版
[α] _D ²⁰	比旋光度(20℃における ナトリウム D 線に対し)
B.	湾
bar	バール
B. C.	紀元前
Bé	ボーメ度
BTU	英熱量
c	サイクル
C.	岬
℃	摂氏温度
ca.	年数の大略を示す。
cal	カロリー
Cal	大カロリー
cgs	絶対単位
cm	センチメートル(cm ² 平方 センチ，cm ³ 立方センチ)
const	定数
d	デシ(=1/10)
d ¹⁵	比重(15℃における)
d-	右旋
D.	砂漠
dB	デシベル
deg	度(温度)
dyn, dyne	ダイン
E	東経
emu	電磁単位
eV	電子ボルト

F	ファラッド
°F	華氏温度
ft	フィート(ft ² 平方フィー ト，ft ³ 立方フィート)
g	グラム
G	ギガ(=10 ⁹)
G.	湾
gwt	グラム重
h	時
ha	ヘクタール
HP	馬力
Hz	ヘルツ
in	インチ(in ² 平方インチ， in ³ 立方インチ)
I.	島
Is.	諸島(列島)
IU	国際単位
k	キロ(=10 ³)
K	絶対温度
kc	キロサイクル
kcal	キロカロリー
kg	キログラム
km	キロメートル(km ² 平方キ ロ)
kV	キロボルト
kW	キロワット
kWh	キロワット時
l	リットル
l-	左旋
L.	湖
lb	ポンド
lm	ルーメン
l. t	ロング・トン
lx	ルクス
m	メートルまたは分
m-	メタ
M	メガ(=10 ⁶)
Mc	メガサイクル
mb	ミリバール
mg	ミリグラム
mks	mks単位
mm	ミリメートル

mmHg	水銀柱の高さ(mm)
mol	モル
Mt.	山
Mts.	山脈，山地
mμ	ミリミクロン(=10 ⁻⁹ m)
μ	ミクロまたはマイク (=10 ⁻⁶)
μ	ミクロンまたはミュー (=10 ⁻⁶ m)
μμ	ミクロミクロンまたはミ ューミュー(=10 ⁻¹² m)， ただしmμをμμとも記す。
n	ナノ(=10 ⁻⁹)
n _D ¹⁵	屈折率(15℃におけるナ トリウム D 線に対し)
N	規定，または北緯
Nr.	号，または番
o-	オルト
oz	オンス
p	ピコ(=10 ⁻¹²)
p-	パラ
P.	半島
pH	水素イオン濃度指数
ppm	ピーピーエム(=10 ⁻⁶)
PS	メートル馬力
R.	川
rpm(h)(s)	1分(時)(秒)間回転数
S	南緯
S.	海
sまたはsec	秒
s. t	ショート・トン
St.	海峡
t	トン
V	ボルト
W	ワット，または西経
Ω	オーム
/	生没年などの年数の両説 を示す。
%	パーセント
‰	パーミル
♂	雄
♀	雌

《地図記号》

記 号	各 国 地 図	分 県 地 図
	国境	県境
	省・州・県境	
	鉄道	国鉄
	特殊軌道	私鉄
	運河	特殊軌道
	主要道路	国道
		鉄道連絡線航路
	パイプライン	
	首都	都道府県庁所在地
	主都(省・州・県)	市
	大都市	
	中都市	町
	小都市・町，その他	村・字，その他
	山頂	山頂
	峠	峠

注 その他慣用化している記号は適宜使用した

別刷図版目次

書	13～24
上信越高原国立公園	137～140
商船	157～160
肖像	169～172
正倉院	181～186
浄土教美術	203～204
鍾乳洞	221～222
障壁画	239～242
縄文式文化	275～278
食虫植物	343～344
ジョット	409～410
ジョルジョーネ	443～444
知床国立公園	485～486
城	495～500

しよ 書 文字を審美的対象として書く一つの特殊な芸術をいう。この芸術は古くから中国に発達し、中国の文字、すなわち漢字を使用する朝鮮・日本および安南の諸国にも発達した。もっとも西洋にもカリグラフィー calligraphy といって、文字を審美的対象として書くことが全然なかったわけではないが、中国のばあいにくらべて、その意義や重要性は、ほとんどゼロにもひとしい。したがって書は中国ならびに中国文化圏内にあった諸国の特有の芸術といってさしつかえない。しかも中国では、書はまったく独立した立派な芸術であるばかりでなく、文学や絵画とあいならび、またはそれらの芸術と融合しつつ、中国文化史上、長いあいだ重要な地位を占めてきたものである。これは中国の文字が、西洋のアルファベットとは違って、もともと絵文字から発達したものであるという漢字の特殊性にもとづいている。もちろん漢字は、絵文字そのものではない。また漢字のなかには、西洋のアルファベットほどではないが、表音の性質をもっているものがないではない。むしろそうした文字のほうが多いともいう。しかし、もともと漢字は絵文字を大胆に抽象化するとともに、そうした抽象化された基本文字の組合せやその他の方法によって、いかなる言語をも写しうるように考案されたところの文字である。この中国上古における漢字形成の過程において、あたかもこんにちの抽象絵画が高度の美的直観と構成上の苦心とを必要とするとおなじく、そこになんらかの美的配慮が払われなかったはずはない。まことに漢字ははかり知れない造形の苦心の成果になるもので、それが視覚芸術として審美的対象となる可能性は、最初から漢字そのものに内在しているのである。中国において、書が特殊な芸術として発達したのも当然である。書と漢字とはじつに不可分の関係にあるといつてよい。

古来中国文化圏に属し、漢字を使用してきた朝鮮・日本・安南の諸国には、書が当然の結果として発達した。それはもちろん中国の影響を受けたものであるが、それぞれの民族性の相違は、その書に反映して、多少の特性を示した。そのうち、とくに著しいのは日本であって、日本では漢字から脱化した仮名という特殊な文字を発明した結果、その仮名を審美的対象としてかく一種独特の書を発達せしめた。いわゆる仮名書道である。書の本流である中国の書からいうと、一つの支流ではあるが、まったく特異なものとして注意すべきである。なお朝鮮でも諺文(おんもん)という特別の文字を発明したが、これは日本の仮名のように書としては発達しなかった。諺文がもともと漢字から出たものでないからであって、この点からいっても、書が漢字と不可分の関係にあることが理解できよう。近時日本で前衛書道と称し、文字性のない書を主張する一派があるが、文字性を離れて書が成立することは書そのものの本来の性質からいって肯定できない。

【中国】中国の書は、その文字とともにあったものと考えられる。もちろん中国の原初の絵文字がいかなるものであったかはわからない。しかし、それがいか

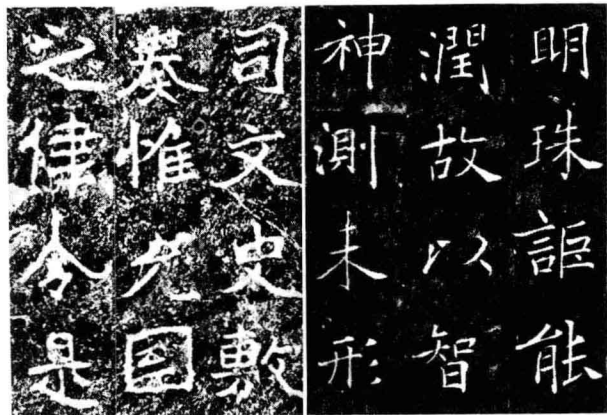
なるものであったにせよ、近年河南省や甘肅省から発見せられた彩陶土器に見られる人間や鳥獣を表現した絵画の例から考えて、それはおのずから美術的な関心をよびおこすものであったに相違ない。ここに中国の書の芽えを認めることは、必ずしも無理ではなからう。しかし、こんにちわれわれが確実に接することのできる中国最古の文字は、殷代の〈甲骨文〉で、これは文字としてすでに相当に発達した段階に至っているものである。その年代は、だいたい前14世紀から前12世紀に至る時代のもので推定されている。ところでこの甲骨文の書き方を見ると、そこに五つの時代的差異による類型が認められるという。そしてそのそれぞれの特色は、雄偉(ゆうい)・謹飭(きんちやく)・頽靡(たいび)・勁峭(けいしょう)・嚴整(げんせい)と一般に評されている。これは早く殷代から文字を無意識のうちに芸術化する傾向のあったことを示すものである。それからもう一つ殷代の文字を伝えるものに、いわゆる〈金文〉がある。いったい中国では、殷代の末期以来、さかんに精巧な青銅器が制作された。その種類には、祭器、樂器、兵器など、いろいろのものがあるが、それらの銅器には多く銘文が刻された。その文字のことを金文という。殷代の金文には細い曲線をもってかかれた流動的で柔媚(にゅうび)な趣をそなえたものがあって、これは甲骨文に多く見るところの直線や折線をもってかかれたものと、著しい対照をなしている。甲骨書の書風を〈契刻体〉、金文の書風を〈筆写体〉と名づけるが、前者は刀によって彫りこむもの、後者は筆をもってかいた文字を彫りこむもので、殷代の書は、だいたい契刻体から筆写体に進んだものと考えられる。そうしてそれがつぎの周代の書にひきつがれたのである。

周代は西周時代(ca. 1100~770 B.C.)と東周時代(770~256 B.C.)との二つの時代に分れる。この二つの時代を通じて、その書をうかがうべき資料は、いわゆる金文である。西周時代の金文は、また前期・中期・後期の3期に区分される。前期の金文は、武王・成王・康王の3代の治世にわたるもので、その代表的なものに、《令殷(れいたい)》《令彝(れいひ)》《周公殷(しゅうこうたい)》《大孟鼎(だいうたい)》などたくさんあるが、おおむね筆画がよく整い、典雅な趣に富んでいる。そのつぎの中期の金文は、昭王・穆王の2代の治世にわたるものであるが、この期のものには書として注目すべきものがない。後期の金文は、共王から幽王に至る時代のもので、その代表的なものには、《史頌殷(ししょうたい)》《大克鼎(だいくてい)》《散氏盤(さんしばん)》《毛公鼎(もうこうてい)》など名高いものがあり、いよいよ均整美をそなえた優麗な書を形成している。おそらく金文最盛期の書としてよからう。これにつぐ東周時代は、また前403年を境として春秋時代と、戦国時代とに区分されるが、この二つの時代を通じて金文の上に見られる著しい現象は、西周時代後期のおもっとも発達をとげた金文の典型が、いよいよ崩壊および墮落するとともに、当時の政治的情勢によって、地方化の行われていったことであ

る。そのうち南方の楚の地方におこった〈鳥書(ちょうしょ)〉という装飾的な書体や、西方の秦の地方におこった〈籀文(ちゅうぶん)〉という書体などが、著しい特色をそなえ、書としても一種の美しさを表わしているほかは、ほとんど書として注目すべきものは現われなかった。それがやがて秦の天下を統一する(221 B.C.)とともに、秦の籀文、さらに籀文を母体として、それから脱化した〈小篆(しょうてん)〉という書体がおこって、そこに新しく書の発達を見ることになるのである。なお、秦の籀文でかかれたものとして、〈石鼓文(せっこぶん)〉という名高い石刻のあることを注意しておこう。

秦代の書は、始皇帝が天下を統一した後、みづから天下を巡幸して建てたところの頌徳碑によって代表される。これは一般に秦の刻石と称せられているもので、もとはすべてで7石あったという。すなわち《嶧山(えきざん)の刻石》《泰山(たいざん)の刻石》《鄒邪台(ろうやだい)の刻石》《芝罘(ちいふ)の刻石》《芝罘東觀(ちいふとうかん)の刻石》《碭石山(けっせきざん)の刻石》《会稽山(かいけいざん)の刻石》である。以上の7石のうち、いまは泰山と鄒邪台の刻石のわずかな文字が、拓本によってその面目をかりうじて伝えているにすぎないが、いずれも斉整した品格の高い小篆をもってかかれている。小篆は始皇帝の信任を得ていた政治家の李斯(りし)が発明した書体で、その形がはなはだ端正であるばかりでなく、じつによく均整のとれた美しさをもっているところに大きな特色がある。そして以上の7石は、その小篆の発明者である李斯がみづからかいたものといわれている。

秦朝がほろんだ(207 B.C.)のち、それについておこったところの、いわゆる前漢の王朝は、中国の書の歴史からいうと、ほとんど暗黒時代で、これを徴すべき資料に欠けている。ただこの時代に、小篆がそれよりも簡便にかかれる〈隸書〉に、おいおい移りゆきつつあったことだけは、ほぼ想像せられるのである。そしてその隸書が単に字体的に完成するのみでなく、芸術的にも完成の域に達して、中国の書が再び開花するまでには、およそ300年の長い準備期間を要した。われわれは前漢についておこった後漢の王朝の末期、すなわち紀元2世紀に至って、はじめて中国の書の復興を見るのである。この重要な復興時代の書をこんにちに伝えていのは、多くの石碑である。いずれもみな書としてすぐれたものばかりであるが、その中でもとくに名高いものを年代順にあげると、《開通褒斜道石刻》(褒斜道(ほうやどう)を開通する石刻)、《紀三公山碑》(三公山をまつるの碑)、《楊孟文石門頌》(楊孟文(ようもうぶん)の石門頌)、《韓勅造孔子廟礼器碑》(韓勅(かんちやく)が孔子廟(びょう)の礼器(らいき)を造るの碑)、《郎中鄭固碑》(郎中鄭固(ろうちゅうていこ)の碑)、《魯相史晨饗孔子廟碑》(魯相史晨(ろしょうしん)が孔子廟を饗(きょう)するの碑)、《李翁西狭頌》(李翁(りきゅう)の西狭の頌)、《石經(せきけい)》《白石神君(はくせきしんくん)碑》《郃陽令曹全(こうようのれいそうぜん)碑》の諸碑がある。これらの諸碑の書を見ると、それぞれ個性をそなえている



中国の書。左は鄭道昭の《鄭文公碑》(拓)、右は褚遂良の《雁塔聖教序》(拓、部分)

が、おのずからいくつかの様式にわかれるように、だいたいにおいて古い年代のものほど渾厚(こんこう)であるのに対して、年代のくだるにしたがって流麗となり、方整となって、やがてこんにちの楷(かい)書の体になくなってゆく。《開通褒斜道石刻》は66年(永平9)に刻せられたものであり、《鄧陽令曹全碑》は185年(中平2)に建てられたものであって、その間120年のへだたりがあるが、前者と後者との書風は著しく異なっている。前者の書体は長短広狭がはなはだふそろいで、いかにも古朴なところがあるが、後者になると、これとはまったく対照的で、もう一歩進むと、流麗というよりも軽はずみになりかねないところまできている。後漢の隸書として最高峰をなすのは、その中間に位する《韓勅造孔子廟礼器碑》あたりで、それに《石經》は、名高い文人の蔡邕(さいいゆう)の筆跡といわれるだけに、書としてははなはだすぐれており、これらの石碑の書は、いわゆる「漢隸(かんれい)」の典型といっさつつかえない。それから後漢のごく末期、すなわち3世紀の初めころになると、漢字が古代型の「篆」(すえん)から近代型の「楷」(かい)・「行」(ぎょう)・「草」(そう)に脱化してくるが、とくに草書が発達して、その名人に張芝という書家が出た。これは専門の書家として正史に名をとどめる最初の人物であるが、こうした専門の書家が出るに至ったということは、この時代になって書が一つの独立した芸術として、はっきりと一般から認識されるに至ったことを物語るもので、書の興隆してきた徴とすることができよう。

この後漢の王朝に次いで、魏・呉・蜀のいわゆる三国の鼎立(ていりつ)した三国時代を経、さらにそれに次いで天下を統一した西晋の末に至る時代、すなわちだいたい3世紀の時代は、古代型の篆・隸と近代型の楷・行・草とが、たがいに交錯して行われたようである。何か儀式ばったものなどには、多く隸書が用いられたようで、たとえば魏の《公卿(こうけい)上尊号奏》(公卿が尊号をたてまつるの奏)、《受禅(ゆずりをうくる)表》《孔羨(こうせん)碑》や、西晋の《任城太孫夫人碑》、《皇帝三臨辟雍碑》(皇帝が三たび辟雍(へきよう)に臨むの碑)、《齊太公呂望碑》の諸碑は、その例である。これらの諸碑は、前代からの伝統をうけて、堂々たる隸書をもってかかれ、しかもその書は、後漢の末の流麗なものにくらべて、かえって筆力の強いものとなっている。これはおそらく流麗な隸書が、おい

おい発展して楷書に進んでゆくので、新しく隸書をかくのに、ことさら古い隸書を意識的に学んだ結果であろう。しかし、古代型の篆・隸は、これらの諸碑の性格から考えても、ようやく実用性を失いつつあったことは確かで、それに代わって楷・行・草の新しい書体が実用に供せられるようになってきたことが想像される。ただ、そうした新しい書体は、書体的にも芸術的にもいまだ完成を見るには至らなかったで、いろいろな人物がくふうをめぐらしたらしく、この時代の書家として楷書をよくした魏の鍾繇(しょうよう)の名が伝えられ、草書の名人として知られる後漢の張芝と併称せられているが、これらの書家は、要するに新しい楷・行・草の完成に骨折ったものと考えられる。しかし、そうした困難な仕事は、それらの書家によっては完成せられず、それからおよそ100年を経て、東晋の初め、すなわち4世紀の半ばころに至って、はじめて完成することになったのである。その偉業をなしとげた天才こそ、古来書聖と仰がれる王羲之(おうぎし)その人で、ここに中国の書は1時期を画したのである。

王羲之の完成した楷・行・草の3体の書はもともと王羲之が名族の出身であるだけに、いかにも貴族的な芳香の高いもので、典雅端正、しかもその間に王羲之の個性から発したひょうびょうたる仙(せん)気ともいふべきものを揺曳(ようえい)せしめているところに、これまでの書とはまったく異なった一種の風格を認めることができる。そうしてその書風は、東晋以後、南朝の宮廷を中心とする貴族社会の間に随喜せられてきたのみならず、ながく中国の書の典型として、こんにちまでほとんど絶対的といつてもよいほどの權威を維持してきたのである。王羲之の書としては、楷書に《樂毅論(がきろん)》《東方朔画賛(とうほうさくのがのきん)》《黄庭経(こうていけい)》などがあり、行書としてはとくに名高い《蘭亭序(らんていじょ)》、および《集王聖教(しゅうおうしょうぎょう)序》があり、草書としては《十七帖》が知られているが、しかし、じつは日本に伝わっている《喪乱帖(そうらんじょう)》《孔侍中帖》の二つがもっともすぐれている。なお、王羲之の子の王献之も書にすぐれた天才で、この父子のことを古来併称して「二王」といっている。この二王が出て、はじめて中国において書が独立した芸術としての地位を確保するに至ったのであって、またそれにつれて、おいおい書の批評などもさかんになり、梁の袁昂(えんこう)の《古今書評》とか、庾肩吾(ゆけんご)の《書品》などというものが、あいついで現われた。これはまったく書が詩文などとあいならんで重んぜられてきたことを示すもので、そうした情勢をかもした基礎を築いたところの二王の功績は、まことに大きいといわねばならぬ。

しかし、王羲之の出た時代は、中国が南北の両朝に分裂して、たがいに抗争をつづけていた時代で、したがって南朝人である王羲之の書は、北朝にはそれほど影響を及ぼさなかった。北朝では古い漢代以来の伝統をうけつぎ、南朝の書の典雅端正なものに対して、精強質朴な特色を示した。もっともこれには、南北両朝の

民族性の差異も、大きな素因をなしていることが考えられる。南朝は文化的に洗練された漢民族の建てた王朝であるのに対し、北朝は北方の未開民族が中原に侵入して、漢民族の故地に建てた王朝である。そうした異質的な両王朝のものとあつては、おのずから文化もあい異なった様相を呈することは当然で、書風のみがひとりその圏外に超然たることはありえなかったのである。そうした北朝の書を代表するものとしては、河南省の洛陽にある竜門石窟(せつくつ)の造像に刻せられた銘文を第1にあげるべきであろう。その造像銘は多数存在するが、いずれも北魏のもので、中でも《始平公造像記》《孫秋生等造像記》《楊大眼造像記》《魏靈藏造像記》がもっとも書としてすぐれており、とくに《竜門四品》と称されている。それからまた山東省の各地の高陵(こうりやう)な絶壁に刻せられた鄭道昭(ていどうしやう)の多くの碑がある。この鄭道昭は北朝きっての書の名人で、これはまた竜門石窟の銘文とは、あい異なった風格をそなえている。そのほかに、北朝の書をうかがうべきものとして、北魏には《弔比干墓文》(比干の墓を弔う文)とか、《張猛竜碑》とかがあり、東魏には《李仲璇修孔子廟碑》(李仲璇(りちゅうせん)が孔子廟を修むるの碑)とか、《敬使君碑》などがあつて、いずれも有名である。また近年になって、河南省や陝西省の各地から多くの墓誌が発掘せられ、それらの中には書としてすぐれたものが少なくなく、たとえば北魏の《刁遵(ちょうじゅん)墓誌》《崔敬邕(さいけいゆう)墓誌》《張猛女墓誌》、それから東魏の《王僧虔(おうそうけん)墓誌》《高湛(こうたん)墓誌》など、その代表的なものといえよう。このように北朝の書は多くの石刻となって存しているのであつて、南朝の書が多く法帖として摹刻(もく)されて伝わっているのと、著しい対照をなしている。そうしてまた、北朝の書はほとんどみな楷書であるが、南朝の書は、大半は行書か草書である。これも著しい対照をなしている。しかし、南北朝時代も末期になるにしたがって、南朝の文化が北朝に浸潤しつつ、しだいに同化してゆく傾向があつた。それでこれまで北朝で行われた渾朴な書風も、しだいに洗練せられて道麗(しやうれい)におもむき、勁悍(けいかん)な筆法は、おいおい彫琢(ちやうたく)せられて秀潤を加え、新しい様式を生むにいたつた。そうしてそれはまた隋が南北両朝を統一する(581)にいたつて、いっそう拍車をかけた。この隋の時代の書には、《龍藏寺碑》《啓法寺碑》《美人董(とう)氏墓誌》《蘇孝慈(そこうじ)墓誌》などをかぞえることができ、そのいずれも新しい様式を代表している名品であるといえることができる。

こうした新しい様式の書は、唐朝の成立する(618)に及んで、いちおう完成の域に達した。それを代表するのが、すなわち初唐の三大家と称せられる欧陽詢(おうようじゅん)、虞世南(ぐせいなん)、褚遂良(ちよすいりやう)の3人である。欧陽詢と虞世南とは、いずれも南朝の陳に生まれ、隋に仕え、それから唐に帰した人物である。その唐に帰したときには、すでに60歳に達していた。したがって、

ふつうには初唐の三大家と称せられているが、むしろ隋から唐初にかけて一つの時代を画した大家といつてよい。歐陽詢の書としては、《皇甫誕(こうはたん)碑》《化度寺僧邕(ゆう)塔銘》《房彦謙(ぼうげんけん)碑》《九成宮醴泉(きゅうせいきゅうれいせん)銘》《温彦博(おんげんはく)碑》の5碑が有名で、なかでも《化度寺僧邕塔銘》と《九成宮醴泉銘》とは、古来楷書を学ぶ最高の模範とされている。それから虞世南の書としては《孔子廟堂碑》が世に知られている。これもひじょうな名品で、古来楷書の模範とするものである。初唐三大家のうちで褚遂良は、欧・虞の2人にくらべて年代が少しおくれるが、その書風もいくぶん異なっている。それは褚遂良の書として名高い《伊闕仏龕(いけつぶつがん)碑》《孟法師碑》《雁塔聖教(がんとうしょうぎょう)序》の3碑の楷書を、欧・虞のそれと比較するとよくわかる。王羲之の伝統をもっとも正しく伝えているのは、虞世南である。虞世南は、王羲之の7世の孫として書をよくした陳の智永に学んだというだけに、その痕跡(こんせき)が著しい。欧と褚とは、ともに古い隸書の法をとりいれているのが特色であるが、とくに褚は風格がはなはだしく、欧とはまた違った風格をつくり出している。概していうと、欧は峻拔をもってまさり、虞は遒媚をもってまさり、褚は妍麗(けんれい)をもってまさっている。しかし、それらの書の根底をなしているのは、なんといっても王羲之で、上品というか典雅というか、貴族的な書であることにはまちがいない、そしてそれが当時の上層階級の趣味にあったものであったことは、もとよりいうまでもない。こうした王羲之を典型とした書の流行したことは、また唐の太宗の感化を見のがすわけにゆかない。太宗は王羲之の崇拜者で、みずからも書をよくした。その書として、こんにち《晋祠(しんし)銘》《温泉銘》などという石刻が伝わっている。こうして初唐は、王羲之を宗とした三大家の書風が流行し、わけても褚遂良の書風の流行となったのであるが、唐の貴族社会がしだいに動揺しはじめてくるにしたがって、少しずつ新しい機運の胎動がはじまってきた。その兆候の現われてきたのは、玄宗の開元(713~741)から天宝(742~755)に移る時代である。その先駆者ともいえるべきものは張旭で、杜甫の名高い《飲中八仙歌》の中に見える人物である。とくに草書をよくし、自由奔放、何ものにも拘束せられない、めまぐるしいほどの変化に富んだ、特殊な筆法を発揮した。これは当時としては、実に破天荒のことであつたに相違ない。当時はまだ李邕(りゆう)などという保守派の書家もあり、一代の正宗と仰がれていたのである。しかるに張旭によって投げられた一石は、やがて時代の進行するとともに、その波紋をしだいに大きくしていった。そしてついに顔真卿に至って、革新派の書を大成するにいたるのである。

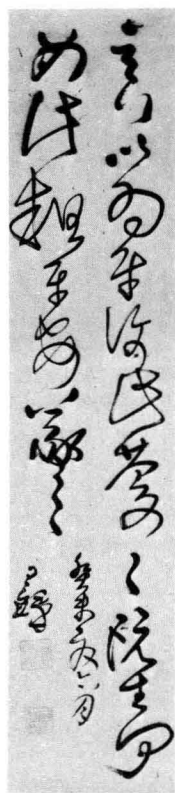
顔真卿の出たのは、中国が中世から近世へと大変革を遂げようとする、もっとも大きな歴史の激動期にあたっていた。六朝(りくちょう)以来久しく政權を掌握してきた門閥貴族は、その時期から勢力を失墜しはじめ、それに代わって新たに

社会的勢力として新興地主層が台頭し、中国の政治・経済・社会・文化など、あらゆる方面に革新の機運がみなぎったのである。そうした時代において、これまでの貴族的な王羲之を宗とした書が、新しい時代の呼吸とあわなくなったことは当然で、顔真卿は敢然と貴族的な書に反発して、強烈かつ峻厳に、主体的なものの表現を指向し、新しい書をつくり出したのである。その書としては《多宝塔碑》《祭姪文(さいてつぶん)稿》《争座位帖》《郭(かく)氏家廟碑》《麻姑(まこ)仙壇記》《顔氏家廟碑》など、その他いろいろ有名なものが多いが、いずれも男性的な重みと剛気とが満ちあふれていて、しかもその中にどこか渾朴なところがあり、そこに独自の特色を発揮している。これは顔真卿が意識的に王羲之の典型を破ろうとつとめた結果で、その弊としては、あまりに武張って風韻の乏しいものとなっていることである。しかし顔真卿は、ともかく王羲之にみずから対立しようとした大家で、その中国の書の歴史の上における存在は、きわめて大きな意味をもっているのである。この顔真卿が出て以来、王羲之の書風を絶対的な典型として、もっぱらこれを守りてゆくとする、いわば正統的な伝統と、これに反発して新しく独自の書風を創造してゆくとする、いわば革新的な潮流との、二つの大きな勢力の起伏消長が、要するに中国の書の歴史を展開することになるのであって、ここに中国の書の歴史の鍵(かん)けんがあることを知らなければならない。

唐の中葉から五代を経て宋代の末に至るおよそ500年ほどの間は、大勢からいっていわゆる革新派の勢力の伸びた時代である。もっとも唐代は、その中ごろから社会情勢が混乱して、せっかく顔真卿によって築かれた革新派も、その後継者にわずかに柳公権を1人出したくらいで、その勢力を一時停滞せしめた。そののち五代になって、楊凝式(ようぎょうしき)などが出たが、正統派といわず、革新派といわず、中国の書は日に日に衰退の一路をたどるのみであった。しかるに宋朝の仁宗・英宗のころから復興の光が見えはじめ、つぎの神宗、それから哲宗・徽宗の時代になって、その極に達した。だいたい11世紀の後半から12世紀はじめにかけての時代である。この後代の書を代表するものは、蔡襄(さいしょう), 蘇軾(そしやく), 黄庭堅, 米芾(べいふつ)の4人で、これをふつうに宋の四大家と称している。しかしこの4人の中で、蔡襄はすこし先輩にあたり、そのうえ書風も他の3人と異なっている。これをとくに蘇・黄・米の3人に配したのは、蔡が3人の先駆者であつたからである。宋代の真に代表的な書家としては、蘇・黄・米の3人を推さねばならぬ。この3人はほとんどおなじ時代に生存し、その書もほとんど傾向を一にしている。それは、いずれもこれまでの書法にあきたらず、新しく独自の書風をつくり出そうとして、いろいろな古人の書を研究し、一生懸命の努力を試みたことからきている。そうして王羲之の型と顔真卿の型とをともに学びながら、これを止揚しようとしたのである。しかし、そのつくりあげた書風は、やはり顔真卿の型に近いものとなっ

ている。もっとも3人ともそれぞれ特色をもっていて、蘇軾の書は、気魄(きはく)雄大で、渾厚の気がうちに深く蔵されている。それにくらべて黄庭堅の書は、奇峭(きしょう)というか峻拔というか、その禅学の修養からきた一種の鋭い機鋒(きほう)というようなものが特色をなしている。米芾の書は、蘇・黄にくらべると、たぶん正統的で、もっとも技術的にはすぐれている。かくのごとく蘇・黄・米の3人は、それぞれ特色をもっているが、だいたいの傾向はおなじことで、こうした3人の書風、ことに米芾の書風が、その後ながく流行した。しかし、この3人の出たのが宋代の書の頂点で、その後はまた衰退してしまつた。宋は1126年にいわゆる北宋から南宋となるのであるが、南宋時代に出た呉璠(ごかん)とか范成大(はんせいだい)とか張即之(ちやうそくし)などという書家は、けっきょく米芾を学んで、わずかにその皮相をえたにすぎなかったといえる。その革新派の退勢に乗じて、新しく正統派の回復をはかったのが、名高い元の趙孟頫(ちやうもうふ)で、ここにまた中国の書は一転回するのである。

元代のはじめから明代の中葉まで、すなわちおよそ13世紀の末から16世紀のはじめにいたる230年くらいの間は、いわゆる正統派の勢力の伸びた時代である。その先駆となった趙孟頫は、もともと宋朝の宗室から出た貴族で、その書画における天稟(てんびん)は、とくにすぐれたものであつた。王羲之の書の正統的な伝統が、唐の中葉以来とかくかき乱されて、古法の荒廃に帰しているのをなげき、復古主義を標榜(ひょうぼう)して立ったのである。いったい王羲之の書は貴族的で、したがって宋代のように革新派の書の栄えたときでも、宮廷ではやはり王羲之の書風が重んぜられてきたのであるが、そうした伝統を趙孟頫が生まれながらにうけていたことは疑えない。そのうえ天性の書画の才をみがいたので、ついに復古主義の大業をみごとに成就するにいたつたのである。その書は、さすがに神彩煥発(かんぱつ)して、まことに正々堂々たるもので、しかも楷・行・草の各体ともに、ゆくとして可ならざるはなく、その書跡もこんにちに多く遺存している。この趙孟頫が出て、復古主義が一代を風びし、趙孟頫について、鮮于樞(せんしゅう), 鄧文原(とうぶんげん), 康里巎巎(こうりなんなん), 虞集(ぐしゅう)などの諸家が輩出した。そして、こうした復古主義は明代にひきつがれ、明初には、沈度・沈粦(さん)の兄弟をはじめ、宋克(そうこく), 解縉(かいしん), 陳璧(ちんぺい)らを出したが、明初の諸家の書を通じて感ぜられることは、なんとなく活気に乏しく、纖弱の弊に陥っていて、はなはだ低調なことである。そうした時代のあとをうけて、明代の書家として最初に気を吐いた巨匠は、祝允明(しゅくいんめい), 文徵明の2人である。いずれも明の中葉、すなわち弘治・正徳・嘉靖の3代にわたって活躍した。2人とも天分に恵まれ、王羲之の書風を宗としたが、祝は行・草に長じ、文は楷書をよくした。また祝の書は古勁で、文の書は遒麗であるところに、おのの特色を発揮している。しかるに文徵



中国の書。王鐸の《王羲之尺牘》

中国の書。趙之謙の《靈樞》





朝鮮の書。左は李崱，
右は李匡師の筆跡

明は晩年になって、宋の黄庭堅の書を喜び、それを指向した。そしてこの時代から、また革新派がしだいに勢力を伸ばすのである。

明代の中期から清代の中期にいたる、すなわち16世紀の半ばころから19世紀の初めころまで、おおよそ270年くらいの間は、いわゆる革新派の勢力の伸びた時代である。その中心人物となったのは、明代の末期に出た董其昌(とうきしょう)で、その書は、だいたい王羲之を宗としたけれども、その形似を学ぶことを欲せず、その精神を学ぶことにつとめた。その結果は、宋の米芾とはなはだ近いものとなっている。この点が趙孟頫の正統派とはまったく異なり、また純然たる革新派でもないのであるが、やはりいずれかといえば、革新派の系列につらなるものと考えられる。ともかく董其昌によって、これまでの正統派はくつがえされ、新しい傾向に動いてきたのであるが、明末清初はまったく過渡的な混乱時代で、あらゆる方面でこれまでの権威が失墜し、だれもが暗中模索しながら一道の光明を求めているという情勢にあったから、書においても、そうした混乱をまぬかれなかった。名高い王鐸(おうたく)、張瑞図(ちようずい)、傅山(ふさん)などは、みなそうした時代の苦悩をなめた書家で、いずれもすぐれた手腕をもっていたが、これまでの書にあきたらず、新しい書的美を創造しようと焦慮した形跡をのこしている。そうした奔放自在な連綿草(れんめんそう)などをかき、正統的な書の立場から見れば、はなはだ奇怪な書をつくった。こうしたひとびとの時代も過ぎ、やがて清代の康熙・乾隆の泰平の現出を見ると、張照、劉墉(りゅうおう)のごとき大家がでて、おだやかな董其昌の書風を復活した。康熙・乾隆の時代は、董書の全盛時代であったともいえる。

しかるに、清代の嘉慶・道光時代、すなわち、19世紀の初めころになって、中国の書にこれまでいまだかつて見なかった一大変革がもたらされた。いわゆる碑学の興起である。いったい清代では、その初期から実証的な学問が栄え、これを考証学と称した。この考証学の一翼として、古代の金石文字をとくに専門に研究する金石学が発達し、学者の間に、競って各地の埋もれた石碑をさがしあることが流行した。その結果として発見せられたのが、南北朝、とくに北朝の石刻で、それらの石刻の書がこれまでの法帖などに伝わる王羲之の書と著しく異なることに気づき、書はよろしく北朝の石刻をもって正統としなければならない、という

説が唱えだされた。これを首唱したのは名高い阮元(げんげん)で、その説は、つまりこんにちの楷書や行書や草書は、隸書の変化したものであるから、隸法の遺意の存することが必要であるというのである。そしてその説に共鳴したのが包世臣で、この人はそうした書をよくする実技の大家として鄧完白(とうかんぱく)を推称した。鄧は古碑によって篆・隸を研究すること深く、また北碑を学んで、いわゆる碑学の開山となった。この新しい書風は、これまでの王羲之を宗とする正統派とは、まったく対照的な立場に立つが、また顔真卿以来の革新派とも異なり、中国の書に新生面を開いたものといえることができる。鄧完白ののち、この派の大家には、陳鴻寿(ちんこうじゅ)、虞熙載(ぐきさい)、何紹基(かじょうき)らがあり、ごく近年には趙之謙(ちようしけん)、張裕釗(ちようゆうしやう)、呉昌碩(ごしょうせき)などが出た。こんにちにおいても中国では、この一派の書が主流をなしている。

【朝鮮】中国の文化の影響をうけて、朝鮮にもはやくから漢字の書がおこった。その事実をこんにちに伝えるものとして、朝鮮最古の石碑といわれる《粘蟬渠(ねんていけん)碑》のごとき、中国の後漢の時代に相当する時代の石刻が現存しており、それについて高句麗の《好太王碑》とか、新羅の《真興王巡狩碑》とか、数種の石刻が現存している。これらの石刻の文字は、中国の漢や六朝時代の石刻の文字と、ほとんど大差がない。あるいは朝鮮に移住してきた中国人の手になったものかとも考えられる。新羅の統一(668)以後になると、はじめて朝鮮人の書家として金生(きんせい)のものがやましく伝えられるが、これは唐代の初期の風潮をうけて、もっぱら王羲之の書を宗としたものであったらしい。高麗の時代に建てられた《朗空大師白月栖雲(ろうくうだいしはくげつせいいうん)塔碑》という石碑の文字が、この金生の書を集字したものであるところから知られるのである。しかし、その当時朝鮮でとくに喜ばれたのは、唐の欧陽詢の書であって、当時の多くの石碑を見ると、ほとんど欧書一辺倒といってもよいほどである。そしてこの風潮は、さらに高麗朝の末期、すなわち中国の元代の末期にあたる時代まで、ながく600年もつづいた。しかるに高麗朝の末期になって、中国から新たに元の趙孟頫の書風がもたらされ、ここに朝鮮の書はまったく趙書の一色に塗りつぶされ、一太転回を示すことになった。その先端をきいたのは高麗の書家として一世にぬきでた李崱(りがん)で、それについてこれを確固たるものにあげたのは、李朝の安平太君(あんぺいたいくん)である。この趙書一辺倒ともいべき時代は、ごく近年までつづいた。その間に、古くは韓濩(かんかく)、新しくは李匡師(りきょうし)などの名人が出ている。しかし、以上の欧書に傾倒した時代でも、また趙書に傾倒した時代でも、これを通じて、そこに一種の朝鮮的な臭味の認められることは当然で、朝鮮の風土とか、朝鮮人の民族性とかがはたらいて、いわゆる、朝鮮の書を形成しているのである。最後にあげた李匡師の書などは、その意味に

おいて、もっともはなはだしいものであらう。(神田 喜一郎)

【日本】〔古代〕7世紀の初頭、すなわち推古天皇の時代以前における、日本の書の様相は全く不明である。もちろん漢字の伝来はさらに古く、遺品としても、たとえば和歌山県隅田八幡(すだはちまん)所蔵の鏡には、503年と推定される〈癸未年〉の銘文が見いだされる。しかしながら単なる文字としてではなく、書として見るに足る姿で書かれたものとなると、7世紀をさかのぼる実例は全く遺存していない。文献においては、同様の過程を明示する資料を見いだすににくい。

623年(推古天皇31)聖徳太子追善のために作られた、奈良法隆寺金堂の釈迦(しゃか)三尊像に見る銘記は、銅地に刻出されたものではあるが、中国六朝時代の書風にのって、秀抜な趣致が示されている。その他若干の遺品についてみてみると、当時はこの六朝風が主要な書風であったと認められる。そしてこのころの書は、まだきわめて少数のひとびとに限られた技能であり、帰化人ないしその子孫が担当していたと考えられる。7世紀後半になると、だいたいようすが変わってくる。天智天皇(在位661~671)の時代、100巻もの書法、すなわち書の手本が宮廷に存した事実は、上流のひとびとが書に対して寄せた関心のほどを示す資料であらう。のみならず、天武天皇1年(673)には日本最初の一切経書写が行われている。3,000巻にもおよぶ一切経の筆書に堪えるほど、書が普及されていたといえよう。書風においても、初唐のきびしく鋭い趣致を、いちはやく学んだひとびとのあったことが注目される。すなわち天智天皇7年(668)の船首王後(ふなのおびとおうご)の墓誌、天武天皇14年(686)と推定される《金剛場陀羅尼經(こんごうじょうだらにきょう)》など、この新様に従ったと見るべきいくつかの遺品があり、かなりの程度に流行していたことを思わしめる。なお7世紀の遺品は、おおむね銅地に刻出された仏像の銘文や墓誌銘の類であって、紙に筆でかかれたものは、ほとんど見いだすににくい。

8世紀、すなわち奈良の地に都が置かれていた時期は、いま正倉院に残る幾多の遺品について明らかにされるように、日本の書における最盛期のひとつである。唐代文化の摂取による成熟には相違ないとしても、その水準の高さには驚嘆すべきものがある。中央にあって書を業とするひとびとはいうに及ばず、地方官庁から差し出した報告書の類にも、秀逸なる筆跡が見いだされる。制度としては大学寮に書博士があり、学生に教授するとともに、筆跡の巧秀を特技とする書学生の養成にあたっていた。これらの専門家以外に、宮廷や貴族の間にも、書に妙を得たひとびとが少なくない。書が教養として重んぜられた事情は、聖武天皇が光明皇后を妃に迎えた際の贈物に、王羲之の手本20巻が含まれていた一事をもって察知されよう。鑑賞の面においても、欧陽詢の筆跡が屏風(びやうぶ)に仕立てられていたような例があり、程度の進んでいたことが推定される。書風については、唐代の流行を反映して、王羲之がとくに尊重されていたと認められる。しかし

朝鮮の書。《好太王碑》
部分



文献のうえではそれを指摘しうるものの、羲之の行書はともかく、楷書の真の姿はこんにち明らかにされていらないため、遺品について跡づけることははなはだ困難である。そのみならず、このころの書が一般的に唐風を基調にしているのは確かであるが、一々の源流をきわめるのは容易でない。当時はまた写経がきわめて盛んであった。それは国家の事業として遂行され、巨大な量が作成されたばかりでなく、書自体もいたって優秀である。筆写に従事するひとびとが写経の功德(くどく)を深く信じていたとともに、写経生として採用されるのは、得がたい収入を獲得する道でもあった。それと同時に、唐からの輸入にかかる精練された写経が手本になっていたであろうし、唐から専門家が来日したようすもある。

794年(延暦13)平安京に都が移されてから、およそ1世紀の間は唐の文化に対する傾倒がにつき、しかも一段と広い層によって支持された時期である。漢詩が文芸の主流をしめ、勅選の漢詩集が作られていることから、その情勢は明らかにされる。書は一般貴族の教養として重視されるに至り、国史にしるされたひとびとの伝記に、書が巧みであったことをあげてあるばかりでなく、僧職にしても、空海をはじめ書に対して深い関心を有していたひとびとが少なくなかった。最澄のごときも、筆名は高くないが当時一流の能書であり、帰国の際には王羲之の《十七帖》などの書跡を持ち帰った。853年(仁寿3)に入唐した円珍は、とくに依頼して名筆の書いた治部省牒(ちょう)などを携行している。この時期における最も大きな存在が、空海であることはいうまでもない。こんにち遺作に徴しても、その名声のほどは納得できる。嵯峨天皇その他に与えた感化も、察知するにたかくない。しかしながら彼の書は、後世に往々見られるような、圧倒的流行の主体となるといった迎えかたをされたのではなかった。総括的には、唐の流れをくむ時期ではあっても、ひとびとのついで学ぶところは多種多様であったし、各自が単なる模倣に満足しなかったと認められる面がある。空海みずからの書がそれを示している。そしてこの時期の書には、質の上下はさておき、日本的なるものが形成されてゆく過程も見いだされる。同時に看過してならないのは、遊戯的な傾向がようやく顕著になってゆく事実である。空海が得意とした飛白体(ひはくたい)のごときは、毛筆を用いず、書の正道をゆくものではない。彼も十分にその点を心得ていたに相違ないが、それが本格的な書に与えた影響は、決して好ましいものではなかった。筆をもてあそんで、奇趣に人を驚かそうとする見世物的な書は、その辺から発足したと認められる。ひいては、唐風の書が頼みられなくなる一因をなしたともいえる。

9世紀までが中国文化への追従期であったのに対して、10世紀は、いわゆる国風文化の花が開いた時期とされる。ここでまず注目されるのは仮名書きの発達である。すでに10世紀の半ばともなれば、文字として漢字から独立した仮名は、書の観点からも十分鑑賞に堪える程度に成熟したと認められる。そして以後およそ

1世紀の間は、その最盛期と目せられる。漢字とちがって、ここでは特定の個人が重要な役割をつとめることなく、ひとびとの間で盛り上げられていった形で、高い達成が成就されているのは興味深い。女性の基盤のうへに成立した文字は同じく女性の手によって書容が精練されていったといえよう。同時に、人に誇示する意識の少ない消息を、仮名の最上として、率意の書をととうと傾向のあったのが注目される。漢字においては、小野道風によって、いわゆる和様が創始されている。この新しい書風が同時代人から絶大な賞賛を博したのは、均衡のとれたおだやかな姿のためであったと考えられる。いいかえれば、中国の書に共通するきびしさ、あるいはけわしさへの反発である。日本的な漢字の書風が、そのような形で出発しているのをとくに重視する必要がある。しかもこの和様は、以後江戸時代に及ぶ長い期間、日本の書的主流として継承されてゆく。流行の主因が、いちおうまとまりのある字形に到達しやすい点に求められるにしても、その重苦しいにぶさが気にさわらぬのみか、むしろ魅力であったと認められるのは、大きな問題である。さすがに藤原佐理や藤原行成は、道風ほど軟弱ではない。引き締まっていた気品がある。しかし彼らの書風の行われた範囲は案外にせまく、道風のなものの勢力に、とうてい比肩し得なかったのではなかろうか。

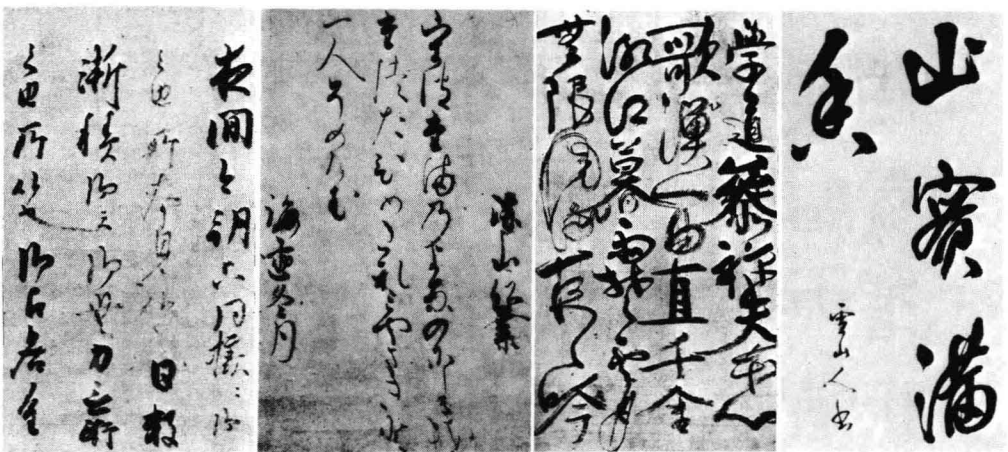
11世紀の末近く、白河上皇の院政が開始されるころになると、書にも新しい動きが顕著になってくる。すなわち従来の温雅を旨とした書風の低迷にあきたらず、その型から離脱して、自由な表現に走ったひとびとの仕事である。漢字にも仮名にも新しい姿容が形成され、旧様への依存を捨てきれないひとびとの間にも、別途を打開せんとする試みが見いだされる。1096年(嘉保3)に没した藤原伊房(これふさ)は藤原行成直系の孫であり、とうぜん父祖の風を継承すべき立場であるにかかわらず、その書は強さを求め、鋭さとはやきを志している。あるいは宋朝の書あたりの刺激を受けての転換であるかもしれない。伊房の風を継いだのは、彼の孫定信であり、この流れに従うひとびとも少なくなかった。伊房も定信も、このような新傾向を出しながら、異端視されなかったばかりか、当代の一流として重んぜられたのは、時代の要求がどの辺に

あったかを物語っている。

12世紀に最も広く行われた藤原忠通の書風、すなわち法性寺(ほっしょうじ)流にしても、忠通の発足点は、やはり在来の書の陥った無気力さからの脱出にあった。しかし定信らが軽快さを求めるのあまり、浮薄に失したきらいがあったのに対して、重厚さを保つことに努めている。彼の書風が喜ばれた原因は、道風のなものを伝えながら、新味を出した点にあるのであろう。ただし法性寺流の流行といっても、たとえば江戸時代における御家流の流行とは、大きな相違がある。関連する範囲が狭小なのはむしろのこと、そのせまい範囲のなかでも比較的有力であったというにすぎない。他に併存するさまざまな書風があり、ことに仮名においてそれは著しい。主潮においては漢字も同様であるが、部分的とはいってもやはり支配的な典型といったものを欠如し、むしろそこに特色があるといえる。なお12世紀には、西本願寺の《三十六人集》や厳島神社の《平家納経》など、料紙にすこぶる入念な装飾を施した類が遺存している。古くは8世紀に紫紙金字や紺紙銀字の経があり、当時の文献には数十種におよぶ写経用紙の種類が見える。突然に起った風習ではないが、このころほど華麗な料紙の使用された時期は、前後を通じて見いだしにくい。

〔中世〕1185年(文治1)源頼朝が政権をにぎった後も、書の世界においては、武士の登場によって、かくべつ新しい情勢が展開されたわけではなかった。文字を書く層はたしかに広がった。しかしながら幕府の関係者は京都宮廷の書風を学び、ついにその域を脱することがなかった。武士独自の風といったものは見いだしがたい。この宮廷の書風を見ると、承久の乱(1221)ころまでは、後鳥羽天皇以下の《熊野懷紙》に明かなように、従来のいわゆる法性寺流が全盛である。線の屈折の鋭さに特色をもつ書容は、武士を圧伏する願望を託すのに適していたといえる。そしてその期待がむなしく砕け去ったのちは、旧時の穏和な趣を志向するようになっていくのが注目される。伏見天皇の書は、この傾向によるひとつの頂点を示すものであるが、天皇の皇子尊円親王が14世紀の前半に形成した書風は、この傾向の終着点である。道風を根底とし、同じく生氣にとほしく気品に欠けたものではあるが、この書風は以後長

日本の書。左から藤原忠通の書状、後鳥羽天皇の《熊野懷紙》、一休宗純の七絶詩偈《漁父》、北島雪山の筆跡



く和様の主流となり、江戸時代に広く流行した御家流も、この尊円流にほかならない。

一方、10世紀以来久しく忘れられていた中国の書は、12世紀の末あたりから、規範としてとりあげられる形勢が復活しはじめ、禅宗の移入が本格化されるのにもなって、再び重要な影響を及ぼすこととなった。禅僧は書との関連が深く、独自のすぐれた風格を示すひとびとが多い。日本の僧のなかでとくに傑出しているのは、14世紀の初期に活躍した大燈国師宗峰妙超である。その後禅宗の世俗化がいちじるしくなるとともに、中国風の書が行われる範囲は漸次増大していったけれども、15世紀に流行した、いわゆる詩画軸の賛で明らかにされるように、小器用な、いたって事務的な書が横行する形勢にある。一休宗純や了庵桂悟など、その型をはずれた人はあるにしても、高雅な趣致を欠いて粗雑である。

このように15世紀あたりからは、和様においても中国風の書においても低迷がつづき、日本の書の歴史では最も精彩にとぼしい時期である。しかしながら、書が一段と広い範囲で関心をもちられるようになったのは、ほかならぬこの時期であった。こういう現象を起した原因はいろいろ考えられるが、連歌の流行ということが、ひとつの大きな役割を演じている。広く諸地方にわたって足跡を印した連歌師には、地方在住の有力な武士などにすめて、貴顕のひとびとに歌書類の筆写を依頼させたり、また堂上の秘庫に襲蔵されてきた古人の名筆を周旋したりしたひとびともあった。一般的にも、寺院を通じて教育が普及され、漸次農村の小寺院においてさえ、住僧が児童の指導にあたるばあひが多くなってきているが、そのさい手習いは最も主要な科目であった。そして普通手本に用いられたのは、日常生活に必要なことから、わきまええられるように編集された、いわゆる往来物であった。なお折本の帖に諸種の筆跡の零片を数多くはりつけた、いわゆる〈手鑑〉が創始されたのは、だいたい16世紀の半ばを過ぎたところと推定される。かかる形式においての書の鑑賞は、同じく普及化にともなうものにほかならない。そして、豊田秀次や石田三成が、空海筆の《風信帖》あるいは狸毛筆奉献表の一部を切り取っているのは、そのような風尚がいかに盛んであったかを物語っている。書跡の筆者を鑑定する職業が起ったのも、

ほぼ同じころと認められる。だいたい書跡の筆者は明確にしえないのが普通であり、したがって鑑定の要求が生じてくるのであるが、このような鑑定が、現在になってもなお書の鑑賞につきまとうているのは、はなはだ特異な現象である。書においては、たとえば絵画に比較して、作品自体を問題にされる程度が低く、結局それは高名の人の書は優秀であるという古来の考え方が、根強く残存しているためといえよう。そのほか宮廷のひとびとや公卿(くきょう)たちの書いた色紙や短冊を、珍重する風習が盛んになってきている。ここにも身分の高い人の筆跡をとうとぶ傾向が明らかにされるとともに、しごく簡便な形式における鑑賞が案出されているのを、注目すべきであろう。茶の湯においても、千利休が床の間にかざったのは、主として禅僧の筆跡であった。ただしこのように書の鑑賞や習字教育が普及されても、それによって書の質的な向上がもたらされたのでなかったことを看過してはならない。

〔近世〕政治上では江戸幕府の成立から崩壊に至るこの時期の、書における最も著しい特色は、中国の書に範を求めた、いわゆる唐様(からよう)の盛況と、それにとりまなう書家という職業の成立と、このふたつであるといえるかもしれない。室町時代に、禅宗寺院を中心として行われた書風は、中国の様式にのっとったにしても、実用本位の筆記体とでもいうべきもので、気字に欠け品格がとぼしかった。それに対して17世紀の中ごろ、明から来日した黄樂宗(おうばくしゅう)の僧隠元らは、書においてもすぐれた手腕を有し、彼らによって示されたところの、当時の中国に流行した書の趣は、練達した姿の書から久しく隔絶されていたひとびとに深い感銘を与えた。また、かの地の商船が長崎にもたらした法帖類によって、事新しく中国の書に対する目を開かれた人々もあつた。大きな転換が、これらの機因によって動きはじめ、その最初にあげられる存在が北島雪山(1636~97)である。さらに彼の門に学んだ細井広沢(1658~1735)は、この新様をもちたてうえに著しい働きを示した。以下幕末に及ぶまでこの派の隆盛は継続されていた。知識人の書は、ほとんどすべてこの系統に含められる。ただ雪山や広沢の時代には、もともと文徴明あたりに代表される明代の書であったが、後になるとさらに古い時代の書に着眼するひとびともあらわれ、趣致は多様になってくる。

つぎに書によって生活の資を得ていた例は、ずっと昔からあり、小野道風のごときもその1人であった。しかし、それらのひとびとは宮廷や幕府の一員として、関係者の命令や依頼に応じて筆をとるにとどまった。書家とよばれるひとびとは、そのような受身の立場にあるのではなく、希望者を募集して習字を教え、しかるべきばあひには作品を売り与えるのを本来の仕事とした。その間に重要な相違がある。そのような書家を出現させ、存在を可能にした理由をつまびらかにするのは容易でないが、それだけ書に対する世間の関心が高まってきたことは疑いない。同時にこの事実は、書の動向についてひ

とつの方向をつくりだすことにもなるのであって、書のあり方のうえでの意味を軽視してはならない。

なおこの時期には、内容において特筆すべきものを見いだしにくいにしても、書に関係した種々の著書が述作されているほか、中国法帖の複製、日本の書跡の版行が始められている。さらに文房趣味の導入、諸般の収集の企図、遺品の探求考証など、書と関連して中国の影響を受けた面も、はなはだ顕著である。しかしながら、当代の書においてすぐれた業績を残したのは、池大雅や僧良寛など、いわゆる書家以外の人が多い。非専門家が専門家をしのぐ事態は、他の時期についても見いだされるところであり、おそらく書に限られた特殊の現象である。他人に誇示することを意識した書は、好みを失うという事実にもとづくものといえよう。上記以外のいわゆる和様については、とうてい唐様ほどの活気を見いだしにくい。学習者の数からいうと、和様のほうが圧倒的に多かった。江戸幕府は、公用文書の書体として尊円親王に源を発する書風を採用したため、普通に書を学ぶ人たちが寺子屋などで教えられるのは、御家流とよばれるこの書風に限られていた。和様にも、本阿弥光悦のごとく独自の境地を開いた人があり、また近衛家熙(いへひろ)は、平安時代の様相を復活した新風を始めている。国学者の間においても、御家流にあきたらず、別個の趣をつくりだしたひとびとがある。けれどもこれらのひとびとの動きは、周辺の小範囲に影響を及ぼした程度にとどまり、結局、古代的なるものへのあこがれから出発し、それをのりこえようとする意欲がほとんど見いだされないところに、限界があつたといえるだろう。

〔明治時代〕あれほど盛んに行われた西欧文化の移入も、書に関しては、全く無関係であつたといつてさしつかえない。1882年(明治15)洋画家小山正太郎のとなえた〈書は美術ならず〉の論は、論旨自体に欠陥があつたにしても、たちまち反響にあつて消滅し、以後それにつづく類は全く跡を絶っている。そして日本画がヨーロッパ絵画の刺激を受けとめ、新しい情勢が展開されたようなことは、書においては全然見いだされない。中国および日本の古来の作品を範とし、そのわく内において新味を出そうとするのがせいっぱいであつた点、従来の動向にくらべてなんらの相違を見いだしにくい。大きな変革が、当然生じなければならないと思わせる事情は、いくらか数えられる。まず小学校の課目に習字がはいって、字の書ける人が画期的に増加し、名品に接する機会が著しく多くなるとともに、精巧な複製が作られ入手も容易になった。学問的な研究も大きな進歩をとげている。にもかかわらず、質的な向上がほとんど実現されていない事実を、見落してはならない。低迷をつづけさせた原因が果たしてなんであつたか、それを明らかにするのは容易でないが、書にたずさわるひとびとの心構えが、江戸時代とさほど変わらなかったことが、大きく影響していると認められる。この時代の書家として聞えた日下部鳴鶴は、書道を芸術などという低級なものにいて扱うことに対し

明治時代の書。左は中林梧竹、右は小野鷲堂の筆跡



て、はげしい憤りをもらしていたというが、一方、彼の仕事は、貴族や官僚や富豪との密接な結びつきのうえにおいて成立していたものにほかならない。なぜを解く鍵(かぎ)は、この辺にも求められよう。書風の変遷については、江戸時代に最も一般的に行われた御家流の、急激な没落がある。明治政府によって公用の書体から追放されるとともに、市人の間にも支持者は影をひそめてしまった。一時的には江戸末期の書家巻菱湖(まきりょうこー1777~1843)の書風がこれに代わったが、1880年(明治13)清国公使館員として来日した楊守敬(ようしゅけい)によって、漢字の書は大きな衝撃を与えられた。彼の持参した13,000点におよぶ拓本法帖の類は、質の悪いわずかな数の法帖にもとづいていた、中国の書に対する在来認識を、根本的に変改せしめた。ことにひとびとを驚嘆させたのは、これまで全く知見の外におかれていた、漢魏六朝時代の碑碣(ひかつ)の拓本であった。これらの書を賞美するのは、清朝になって起った風であるが、その秀抜なる理由を説明する楊守敬の見識は、ひとびとを傾倒させるに十分であった。また同じころ中国に遊んで、親しくかの地の書家に教えをうけたひとびともあり、漢字の書風は、このあたりで面目を一新することとなった。以後現代に至るまで、この清代末期に行われた諸種の書風は、甚大な影響をおよぼしつづけ、それから離れた書は、ほとんど存在を認められないような形勢が持続されてゆく。ふつう六朝書道の名をもってよばれるように、全般を通じて六朝時代の書の表現を渴望する傾向が強いといえる。この時代の書家として代表的な存在をあげると、巖谷一六(1835~1905)、日下部鳴鶴、西川春洞(1847~1915)らがあり、ほかに副島種臣(号蒼海)、中林梧竹(1827~1913)らは、よりすぐれた趣致を推重されているひとびとである。一方、従来の和様は唐様に対立して、仮名書きという独自の領域を有したのみでなく、漢字についても特殊な書法を伝えてきたのであるが、漢字に関しては、この時代以後その法を学ぶ人は絶無に帰したといえる。仮名書きにしても、御家流の系統は全く継承者を失う状態におちいった。そうして平安時代を目標とした動きが、新しく形成されてくるのである。1890年(明治23)ころに結成された「難波津会(なにわづかい)」は、そのような動きのさきがけである。江戸時代にくらべて、古来の名品に接する機会が増加したのみでなく、印刷術の格段の進歩は、一般の認識を進めるうえにあずかって大なるものがあつた。仮名書きの著名人には、多田親愛(1840~1905)、小野鷲堂(1862~1922)などがある。なお1899年(明治32)には、中国の河南省から殷代の甲骨文が出土し、以後約10年の間に、敦煌石窟(せつつ)の写経類その他、中国古代の書の実物が多量に発見された事実は、文化史の研究にとって画期的な意味をもっているが、その詳細が公示されたのは、大正年代に入ってからであり、日本の書のうちには、それほど注目すべき反映は見いだしにくい。

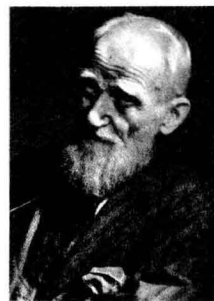
〔大正時代以降〕大正年代になると、実用文字を書くことを、鑑賞の対象とし

ての書から、はっきり区別すべきだという主張が現われてくる。1914年(大正3)には東京市視学の浜幸太郎、1919年(大正8)には時の文相中橋徳五郎らが、小学校の習字教育において毛筆の使用を廃止することをとなえた。結局それは実行されなかったが、書家とよばれるひとびとに与えた動揺は、決して小さなものではなかった。世俗に超絶することを誇りとした従来のあり方を、再考しなくてはならないはめに追いつまされてきたからである。大正末年あたりから、書家の間でいろいろな団体がつくられ始め、作品を公募して定期的に展覧会を開くようになったのは、やはりその反応にほかならない。ただそれらの団体の多くは、主義主張にもとづく結合というより、師承を同じくするひとびとの党派的集団といった面が濃厚であった。したがって、在来の書家のあり方に対して反省が行われるのでもなく、作品としても旧来のわく内での操作がつづけられるにすぎないありきであった。民衆からの遊離という問題の解決については、いわゆる国粹的なものの尊重が、おりよく叫ばれてきたのに便乗することによって、簡単に果たしうると考えられていたようである。1943年(昭和18)に至って、戦争遂行への協力をうたった「書道報国会」に、書家の団体の大部分が統合されたのも、自然ななりゆきであったといえる。しかしその間に、新しいものをめざした動きが全くなかったのではない。比田井天来(1872~1939)は、自己の目をもって古典に対処する必要を力説し、別趣の書風を展開した。また彼の一門には、書を芸術として確立することを志向し、美学ないし芸術学の基礎づけを探究するとともに、作品のうえにも飛躍を試みようとしたひとびとがあつた。しかしながら、天来自身の書は卑俗に墮するという大きな難点をもっているし、芸術としての書に着眼したひとびとも、さしたる業績を示すに至らなかった。第二次世界大戦後も、主流のゆき方は戦前とほぼ同様である。1948年(昭和23)日展に書道が加えられることとなった事実は、なによりもよくその間の事情を物語っている。創始以来すでに40年、古色そうぜんたる官展に好んで参加を求めていった情勢は、事大主義の守旧派の勢力が、どんなに根強く広がっているかを示している。しかし一方には、新生面の打開につとめるひとびとの活動が、近年ことに大きく表面にあらわれてきているのを見のがしてはならない。書かれる文章の内容に近代の詩文をとりあげたり、筆線に叙情的な感覚を盛ろうとする試みは、まだしも従来の書との関連が考えられるが、文字としての字形を排除し墨象の空間構成を追求するひとびとはもちろん、古い漢字の字形にもとづいて造形を企図するひとびとにしても、その出現は戦前においてはほとんど予想されなかったところである。いま書の世界には、これまでに類のない大きな変革がもちこまれてきている。いうまでもなく、上記の新しい動向が、はたして時代に即応する表現へ到達しうるか否かは、今後の推移にかかっている。同時に、これほど前衛的な変換に賛同しえないひとびとの間にも、従来の書に対する真剣な批判が行われている

実情からも新時代にふさわしい書の出現する可能性がある。←別刷図版・書
(藤田 経世)

しよ 詩余 ◇詞(し)

シヨ－ George Bernard Shaw 1856~1950 イギリスの劇作家。アイルランドの首都ダブリンに生まれ、家が貧しかったため学校は小学校へいっただけで、15歳のとき土地周旋事務所の給仕となった。1876年ロンドンに出て、しだいに社会問題に興味をもちはじめ、マルクスの『資本論』などの影響をうけ、シドニー・ウェッブとともに漸進的社会主義団体である「フェビアン協会」を設立した。その後、イギリスに最も早くイブセンを紹介したアーチャー William Archerと知りあい、その影響で彼もイブセンを研究して『イブセン主義真髄』(1891)を出すとともに、イギリス劇壇における最初の問題劇『男やもめの家』(1892)を書いて、一部の識者に認められるようになった。さらに93年に『ウォレン夫人の職業』を書くにおよんで、劇作家としての彼の地位は確立された。この劇は、女性が独立した生活を営もうとしても労働賃金が不当に安く虐待されているという問題を提出したのであると、作者みずからいっているが、それとともに、母親が淫売(いんばい)屋を経営して得た富で安楽にくらすことの不潔さをきらって、自活してゆこうと決心する『新しい女』ヴィヴィをえがきだすことによつて、シヨ－自身のノラを創造したのであるといえよう。その後は成功した喜劇『カンディダ』(1894)、ナポレオンを平凡な1軍人としてえがいた歴史劇『運命の人』(1895)、《シーザーとクレオパトラ》(1898)など10編の戯曲を精力的に書きつづけた。そして20世紀にはいると、シヨ－の最大傑作である『人と超人』Man and Superman (1903)を書き、世界的な劇作家となった。この劇は、男が女を追いかけるという従来のドン・ファン劇のテーマを逆にして、追いかけられるのはむしろ男であるという主張を、彼一流の「生命力」の哲学を基礎として舞台にのせたものである。つぎに重要な作品は『悲しみの家』(1913作、20初演)で、作者は主人公の老船長の口をかりて、イギリスという船は操縦をあやまると難破するぞと警告している。この予言的警告は、1913年にはたしかに適切なものであつた。第一次世界大戦中には非戦論をとなえて彼の面目を発揮したが、注目すべき作品はほとんど書かなかった。戦後、『形而上学的生物学5書』という副題をつけた『メトセラへ帰れ』(1921)を書き、『人と超人』以来の創造的進化論哲学の集大成を戯曲化したのが、演劇的には失敗作で、それよりも23年に書かれた『聖女ジョーン』が晩年の傑作である。ここでシヨ－は、予想に反して、ジャンヌ・ダルクを風刺したり戯画化したりせず、彼女を、神と人間の魂との間に教会や司祭のような仲介者をみとめない新教徒として、またナポレオンの現実的な戦術家として、あるいは近代的ナショナリズムの無意識的な体现者としてえがいている。さらに『リング馬車』(1929)、『善良であるにはあまりに真実な』(1932)など、かなりの数の作品を書いて



G. B. シヨ－

いる。1925年にはノーベル賞をうけた。
↳人と超人 (瀬尾 裕)

ショー Irwin Shaw 1913～ アメリ
リカの劇作家、小説家。ニューヨーク市
に生まれ、ブルックリン・カレッジを卒業
後、放送の仕事に従い、ついで劇作に筆を
染め、反戦劇《死者を葬れ》(1936)、2
人の貧しい男を主人公にした寓意劇《や
さしい人たち》(1939)など、強い社会意
識に貫かれた作品を発表した。第二次世
界大戦に出征して各地に転戦し、戦後そ
の体験から最初の小説《若い獅子たち》
The Young Lions(1948)を書いた。人間
肯定の精神から、3人の兵士を中心に戦
前の市民生活と戦場の生活を描いたこの
作品は、第二次大戦の生んだ代表的な戦
争小説として認められた。その後、左右
両勢力の間にはさまれた放送関係者の悩
みを扱った《不安な大気》(1951)、結婚
生活の諸問題を取り上げた《ルーシー・
クラウン》(1956)などを発表して、中堅
作家として特異な地位を占めるにいたっ
た。ほかに数巻の短編集がある。

(西川 正身)

ショー Sir William Napier Shaw
1854～1945 イギリスの気象学者。パー
ミンガムで生まれ、ケンブリジのエマヌ
エル・カレッジを卒業。初めはキャヴェ
ンディッシュ研究所の所員として、おもに
電気に関する実験をした。1887年ケンブリ
ジ大学講師、97年気象評議会委員を経て
1905年気象台長となり、20年退職後は
インペリアル・カレッジの最初の気象学
教授となった(1924年まで)。1879年気象
評議会の依頼を受け、湿度の測定法の比
較実験をしたのが最初の気象学関係の仕
事で、のち、死ぬまでイギリスの気象事
業、研究、啓発活動に努力した。種々の
国際会議でも活躍し、気象事業の国際協
力を発展させた。おもな仕事の一つは低
気圧の構造の研究で、天気図で空気の流
れを調べることに、ビヤルクネスの模
型に近い結論を出すことができた。また
第一次世界大戦中に発展した高層の研
究の重要性を早くから認め、ダインズ
の高層観測やノルウェー学派の理論を暖
かく支持し、自分でも高層観測の整理に
用いるテフィグラムtephigramを考案した。
1954年に生誕100年を記念して、ノービ
ア・ショー記念賞が設定され、2～3年
ごとに、気象学上のすぐれた論文に贈ら
れることになった。彼の主著《気象学教
本》Manual of Meteorology(1926～31、
全4冊)は、気象学の歴史や当時最新の
理論を公平にわかりやすく紹介しており、
その他にも多くの著作がある。

(吉村 証子)

じょ 序 古くは《毛詩》および《尚
書》の序にはじまる中国の文体の一種で、
事柄の端末を述べた文、つまり〈はしが
き〉のことをいう。そのうち、書物につい
てその編さんの始末を述べたものは《書
序》とよび、古くは《史記》の〈太史公
自序〉などのように、著者自身でこれをつ
づって、編著の巻末におくのが普通であ
ったが、のちには他人に書いてもらう
ならわしがひらけるのにつれて、またお
かれる場所も逆となり、巻首にあるもの
を〈序〉、巻末のものはとくに〈後序〉
とか〈跋(ばつ)〉とよんで区別するよう

になった。序にはこのような〈書序〉の
ほか、骨肉・知友との離別にあたって、
惜別のところを述べた〈送序〉があるが、
これは、もと送別の席上で作られた詩集
の序から中心の詩がなくなり、送別の言
葉だけが独立して体をなしたものである。
自分の所感を述べて人に贈った〈贈序〉
とともに、唐代にさかんにおこなわれた。
このほか、明・清の時代には、人の長寿
を祝う言葉を述べた〈寿序〉というもの
が流行したが、これらは、どれも序の一
体として、文学的に重んじられた。

(高木 正一)

じょ 序 日本音楽の用語で、音楽の
種目や場合によっていくつかのちがった
意味に使われる。(1) 楽曲構成単位とし
ての〈序・破・急〉の序の部分の意。す
なわち、楽曲の大きな構成単位の一つで、
たとえば雅楽で《五常楽序(ごしょうらく
じょ)》というものがそれで、楽曲の第1楽
章に相当する。雅楽の〈序〉には、独特
の演奏形式がある。能楽では、〈序ノ段〉
といういい方があるが、雅楽の序から借
りた言葉で、雅楽のように明確に序・破・
急の構成があるわけではない。(2) 速度
の用語としての〈序・破・急〉の序の意
味。おそいテンポからはやいテンポまで
を3階級に分けて考えて、おそいものを
〈序〉、中間を〈破〉、はやいものを〈急〉
という。日本音楽全体に普通語として使
われるが、能では〈序ノ舞〉〈破ノ舞〉
というような名称もできている。(3) 三味
線(しゃみせん)の節(旋律型)の名。別名
を〈外記(げき)ガカリ〉という。多くは
曲の初めに奏される荘重な前弾(び)き。
(4) 箏(そう)曲や地唄(じうた)の手事(て
ごと)という長い間奏部の最初の段落の
こと。別名を〈マクラ〉ともいう。しか
しすべての手事にあるわけではない。手
事の主体部にはいる前の導入部である。
↳かかり (吉川 英史)

じょ 滁 Ch'u 中国安徽省の東部に
ある町。同名県の県政府所在地。津浦鉄
道(天津～浦口)に沿い、南京対岸の浦口
から約50kmの位置にある。皖山の丘陵が
西より北東へとつらなり、揚子江に注ぐ
滁水の流域平野にのぞむ。清代には滁州
と称した地で、交通上の要地を占め、米・
麦の産地である。(木内 信蔵)

ショア Dinah Shore 1917～ ア
メリカの女性ポピュラー歌手。テネシー
州ウィンチェスターに生まれた。本名フ
ランセス・ローズ・ショア。ヴァンダービ
ルト大学では社会学を専攻、歌はハイ・
スクール時代からレッスンを受けていた。
1938年以来、ニューヨークを中心に活躍
して、しだいに人気者となった。天分の
美声とたくみな魅力ある唱法により、女
性ポピュラー歌手として確固たる人気を
集めている。愛唱していた《ダイナ》がニ
ックネームとなった。(藤井 肇)

ショアカタき ショア硬さ 機械材料
のかたき表示の一つ。金属材料では、シ
ョアカタき試験機で測定されるかたきで
あり、反発かたきの一様。すなわち試料
の試験面に一定の高さから落下したハン
マーのはね上がり高さに比例する数であ
る。ゴムのかたき試験においては、ショ
アカタき(ショア硬度)という表示方法が

ある。これは、ショア・デュロメータ
Shore durometerによって測定される
値である。すなわち一定形状をもつピン
形の圧子をゴム試料中に一定荷重で押し
込んだときの押込深さに応じた数値(か
たき)が0～100の目盛上に指示される。
↳かたき試験 (吉沢 武男)

じょあん 如庵 織田有楽(うらくー
1547～1621)の好みによる代表的な茶室
で、国宝建造物。1618年(元和4)に建て
られ、古くは京都建仁寺内の正伝院にあ
ったが、1893年(明治26)に正伝院がも
との永源院の場所に移ったあと、有楽館と
して保存されていた。1908年(明治41)
に如庵とこれにつづく書院とが売りはらわ
れて、三井本家の所有となった。三井家
では東京の本邸に移したのち、38年(昭
和13)に神奈川県大磯町の同家別邸城山
荘内に移した。70年名鉄の所有となり、
71年犬山市大字御門先に移築された。

如庵は有楽が晩年に正伝院の隠居所に
自分の好みで建てた茶室であり、この点
茶道史上意義深いのが、それだけでなく独
創に富んだ茶室としても名高い。二畳半
台目(だいま)一部地板入(炬は向切(むこ
うぎり))の広さで洞庫(どうこ)つきで、
有楽窓という竹を縦にうち詰めたくめく
ら窓があり、また腰張(こしはり)が古
い暦で張られて、暦張の席(暦席)と呼ん
で有名である。比較的原形がよく保存さ
れており、あらゆる点からみて貴重な茶
室である。(吉田 堯文)

ジョアンいつせい ジョアン1世 João
I 1357～1433 ポルトガル王(在位1385
～1433)。アヴィッシュ朝の創始者。ペドロ
1世の庶子であるが、カスティリヤ王家
のポルトガル王位干渉に対する国民的抵
抗のうちに擁立され、コインブラのコル
テス(議会)で王に選ばれた。その政治的
背景は新貴族フィダルゴ層とリスボンな
どの海港都市であった。ランカスター公
ジョン・オブ・ゴントの娘との結婚、
および対イギリス永久同盟を内容とする
ウィンザー条約(1386)に明らかな親英政
策は、封建的土地所有よりも海関税収入
に主として依存したアヴィッシュ朝の、カ
スティリヤと結ぶ大土地所有貴族を抑え
る中央集権確保の政策の保証になっていた。
1385年イギリス軍の協力を得てカス
ティリヤ軍を破ったアルジュバロタの戦、
またこれを記念して建築を開始したバタ
ーリャ寺院、さらに王の子エンリケ(ヘン
リー航海王)のアフリカ調査開始(1415以
降)が記憶される。(赤井 彰)

ジョアンごせい ジョアン5世 João
V 1689～1750 ポルトガル王(在位1706
～50)。スペイン継承戦争のさなかに即位
した。イギリスと同盟していたが、やが
て1713年のユトレヒト条約でスペインお
よびフランスと講和、ブラジルとくに現
在のウルグアイ付近の主権を確立、ブラ
ジルのゴルド・ラッシュに助けられて
王の宮廷ははなやかな啓蒙主義と浪費
的な僧職政治にみだされた。ローマ教皇
から〈最も信仰あつき王〉Rei fidelissimo
の称号を受け、17年トルコ海軍をマタ
ン岬に破った〈十字軍〉が知られている。
(赤井 彰)

ジョアンさんせい ジョアン3世 João III 1502～57 ポルトガル王(在位1521～57)。マヌエル大王の子。在位時代は航海事業の継続の反面、ポルトガルの衰退とスペインへの接近の時代であった。宗教裁判の採用(1531)とイエズス会によるコインブラ大学経営(1540)が記憶される。

(赤井 彰)

ジョアンにせい ジョアン2世 João II 1455～95 ポルトガル王(在位1481～95)。「完全王」O principe perfectoとよばれる。国内大貴族とくにポルトガルの王を領したブラガサを倒し、その内通していたカスティリャ王家の脅威を除き、一挙に強力な中央集権を実現し、積極的にエンリケ(ヘンリー航海王)のアフリカ西岸探検事業を継承した。喜望峰の発見(1488)と、トルデシージャ協定による東半球の確保(1494)が記憶される。コロンブスの計画にはアフリカへの関心が強すぎて応じえず、スペインに功を奪われた。精力的なルネサンス型君主であり、その宮廷画家にヌノ・ゴンサルヴェスがいた。

(赤井 彰)

ジョアンペソア João Pessoa ブラジルの北東端部にあるパライバ州の主都。人口222,000(1978推定)。パライバ川に臨み、河口にある外港カペデーロを通じて綿花、砂糖、サイザル麻、タンゲステン鉱を輸出する。セメント工業、葉巻タバコ製造が行われる。市は1585年に建設され、フィリップペア Philippea とよばれていたが、17世紀のオランダ領時代はフレデリクスタット Frederikstad とよばれた。

(山崎 嶺一)

ジョアンよんせい ジョアン4世 João IV 1605～56 ポルトガル王(在位1640～56)。ブラガサ朝の創始者。ポルトガルがスペイン王のために独立を失っていた時代(1580～1640)はスペインの衰えとともに終り、比較的容易に王位についた。外交上の難問題が多かったが、1654年ブラジルからオランダ人を退去させた。

(赤井 彰)

ジョアンろくせい ジョアン6世 João VI 1769～1826 ポルトガル王(在位1816～26)。女王マリア1世の摂政(1792～1816)としてフランス革命にあい、国際反革命軍に賛成して兵をカタロニアに送ったが1794年大敗し、さらにナポレオンの圧迫を受け、ついに1807年ナポレオンの部将ジュノーに侵入され、イギリスのすすめで宮廷をあげてブラジルに亡命した。ナポレオン没落とともに、イギリスの援助を受けつつフランスに抵抗していたポルトガル本国に民主的憲法への動きがおこり、そこで安定勢力として1821年帰国した。議会に従い第3子ドン・ミゲル派の反動をおさえ、さらに長男ペドロを皇帝(ペドロ1世)とするブラジル独立(1825)を承認した。

(赤井 彰)

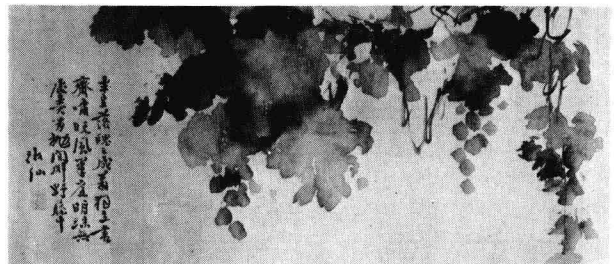
じょい 徐渭 1521～93 中国、明代の詩人、戯曲作家、画家。字(あざな)は文清、のち文長とあらため、天池生、田水月、また晩年には青藤山人などと号した。浙江山陰(紹興県)の人。若いころ、幾度か郷試(3年目に各省で行う官吏の登用試験)を受験して落第したが、その文筆と才気が浙江総督胡宗憲にみとめられ、

そのひざもとに招かれた数年間に、胡宗憲に代わって起草した文章は、当時の有名な古文家である唐荆川(とうけいせん)や茅坤(ぼうこん)を驚かせて名をあげた。このころは彼が得意の絶頂にあった時代で、破れ頭巾(ずきん)に、洗いざらしの着物で、総督の邸内に入出入りするなど、人をはばからない振舞があった。しかし宗憲が失脚して獄に入れられてからは、悶悶(もんもん)の情やるかたなく、ついに発狂し自殺をはかったことも再三であった。また嫉妬(しと)から妻を殺し、獄中に7年をすごした。幸い同郷人の好意で救いだされたが、こうした境遇の転変が形成した不平の気と、持って生まれた放縦な性格とが、彼の詩の上に濃い影をおとしているといえる。その詩は袁宏道から高く評価され、唐の李長吉の詩体を学んだ才気とむ作がある一方、南朝の徐陵にまねた艶麗(えんれい)な作がみとめられる。これは彼が1派の模倣に終始しなかったことを示している。古典的詩文の上で有名であった彼は、また俗語の文学である戯曲、小説にもふかい関心をもった。戯曲を論じた《南詞叙録》は、その知識の博大なことで、後世の戯曲研究家はこれを尊重している。また自作の戯曲《狂鼓史》《玉禪師》《雌木兰》《女状元》からなる脚本集《四声猿》は、袁宏道が、〈意気豪達、近時書生演ずるところの伝奇とはなはだ異なる〉と評している。また元末明初の戦記を主体とした小説《雲合奇蹤》があり、岡島冠山によって翻訳され、〈通俗皇明英列伝〉または〈通俗元明軍談〉の名で刊行された(1705(宝永2))。

書画については、自分では書を第1、詩を第2、文は第3、画を第4と称していたほどの才能があった。画は山水、人物ともにすぐれてはいるが、風韻、格調の最も高い点では水墨花卉(き)画を第1とする。彼は中年以降花卉図を習得したが、その画は同時代の南宗(なんしゅう)画人の花卉図とは異なったひじょうに個性的な表現をしめている。その描法の根底には書の技法や浙江の地方様式としての水墨画法も考えられるが、その作画経歴がおそかったので正統的花卉画法を消化するひまがなく、伝統的四君子画の技法をとり入れて、自己の感動をそのまま表出する逸格な方向にむかったものと思える。晩年はこの書画で口すきをしたが、しだいに蔵書も売りつくし、わらを敷いて寝るという困窮のうちに、72年の数奇な一生をとした。

(岩城 秀夫・鈴木 敬)

ジョイス James Joyce 1882～1941 アイルランドの詩人、小説家。ダブリンに生まれ、イエズス会の学校に学び、語学に非常な天分を示した。聖職につくつもりであったが、ユニヴァーシティ・カレッジ時代に信仰に疑問をもち、アリストテレスやトマス・アクィナスを読んで独自の美学をうち立て、1902年卒業とともに芸術家として生きる決心をし、同年冬ダブリンを去ってパリに向かった。〈ぼくは、家でも祖国でも教会でも、自分が信じないものに奉仕するつもりはない。沈黙と亡命と狡知(こうち)を武器として、芸術のなかに思いいう自由に自分を表現するつもりだ〉という《若き日の芸術家



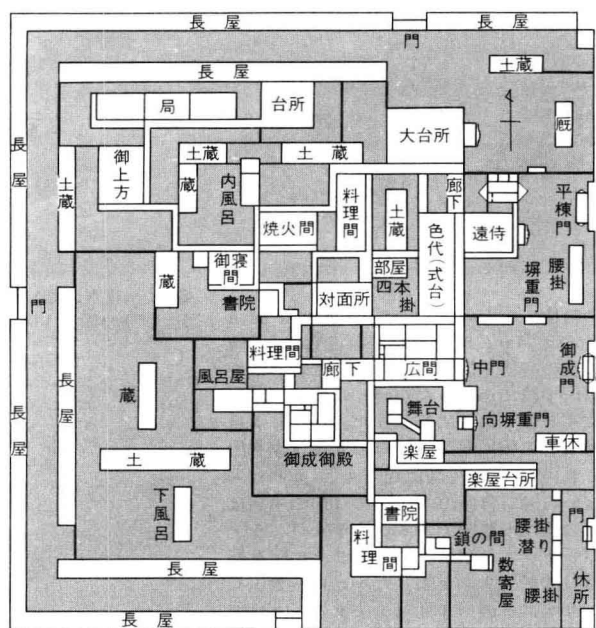
徐渭 《花卉図巻》部分<ブドウ図> 1575

の肖像》A Portrait of the Artist as a Young Man(1916)のなかの言葉は、当時の彼の心境を伝えるものである。パリでは医学校にかよったが長くはつづかず、文字どおり飢えに苦しんだ。1903年4月母危篤の報に帰国し、母の死後は家を出て私立学校の教師になった。《ユリシーズ》(1922)冒頭の古い塔のなかの生活は、この時代の経験である。04年6月ノラ・バーナクルと結婚。チューリヒに職を期待してダブリンを去ったが、けっきょくトリエステのベルリッツ・スクールに英語教師の職を得た。その後の25年間は、著作とその出版のための苦闘の歴史であった。1907年には詩集《室内楽》を出版。短編集《ダブリンの人々》(1914)は1905年に完成したが、出版社との間に深刻な紛争がおこり、問題処理のため帰国した彼は憤然としてダブリンを去り、その後はついに故国の土を踏まなかった。14年にエズラ・パウンドと知りあい、《若き日の芸術家の肖像》はパウンドが主宰する《エゴイスト》誌に連載された。この小説は彼の精神史で、大作《ユリシーズ》の序曲をなすものである。《ユリシーズ》は、1914年ころから貧困と視力の衰えに苦しみながら稿をつけ、21年パリで完成された。これは《オデュッセイア》ののちとして3部18エピソードから成り、1904年6月16日の朝から夜半までのダブリンを背景に、青年ステイヴン・ディーダラスと中年のユダヤ人レオポルド・ブルームの生活を、彼らの意識の内部にまで立ち入ってこまかく描いた異色ある作品で、小説史上に画期的な意義をもつ問題作である。さらに最後の小説《フィネガンズ・ウェーク》Finnegans Wake(1939)は、睡眠中の意識、夢の世界を描いた作品で、《ユリシーズ》の手法をさらに徹底させ、ほとんど読者の理解を拒否する感がある。彼は晩年パリに住んだが、娘の入院や彼自身の健康の衰え、依然とした生活の不安などで悩みが多かった。1940年6月第二次世界大戦でドイツ軍のパリ侵入にあい、かろうじてスイスに避難したが、健康は急速に衰え、翌年1月13日チューリヒで死んだ。病気が癌(がん)であった。→ユリシーズ (上田 勤)

ジョイス

しよいん 書院 [中国] 書院の名は唐代に起り、初めは官衙(かんが)付属の書庫ないしは書籍編集所を意味し、同時に個人の書斎をさす言葉でもあったが、後世になるともっぱら官立にあらざる公立・私立の学校を意味するようになった。宋代には各地に書院がたてられ、書院の長を山長といい、学田の収入で経済を維持し、禪宗の清規(しんぎ)規則規律(きり)の一種)にならいう規を定めて学徒を教育した。なかでも朱子が学を講じた白鹿洞





書院造「匠明」の指図より、書院造の基準型

(はくろくどう)書院が最も有名である。宋以後学問の隆盛に伴ない科挙が盛んになったが、科挙は試験制度たるにとどまり教育制度ではなく、政府は官立の学校をたてても教育に熱心でなく、実際の教育を民間に委譲した形になって、書院が繁盛したのである。したがって書院は時に野党的な色彩を帯び、朱子学も初めは在野的な書院の学として発達し、のちに官学に取り立てられた。明代の陽明学は明末になって東林書院などを背景として天下を風びしながら、ついに官学になりきれなかった。清代に入ると、考証学の流行と一般富力の増進に伴ない、個人蔵書家が民間学問の中心となり、書院は時代におくれて生命を失った。清末西洋文化が輸入され、新式の公私立学校がたてられたが、これを普通に学堂と称して旧式書院と区別する。(宮崎 市定)

〔朝鮮〕高麗時代にも私学校があったが、李氏朝鮮時代になってから国家の奨励により急速に発達した。書院の名は15世紀初めころより現われたと考えられる。それが16世紀ころからは勅額を賜与された賜額書院が栄え、学田の賜与・寄進も盛んとなり、しだいに官学たる郷校にかわって地方の青年の教化の中心となるにいった。とくに南鮮、わけても慶尚道に多く設立され、書院のない邑(ゆう)はない状態であった。これらの書院に学ぶ儒生は首領をかついで党派をつくり、他派を排撃して政権をとろうとし、書院は朋

党の争いの温床となった。そのため李朝末期に大院君の大弾圧を受け、大部分の書院がつぶされ、以後復活しなかった。

(旗田 巍)

しよいんずくり 書院造 近世初期に完成した武家住宅の形式。平安時代に完成した寝殿造(しんでんづくり)が時代の進むにつれて変化し、室町末から桃山初期にかけて、武家住宅の標準的な形式が完成された。これを書院造という。書院造は桃山時代の工匠の伝書である《匠明》にその基準形が描かれており、これによると敷地は方1町ほどで、そのうちにある多くの建物は接客用、主人および家族用、使用人用の三つの部分に大別される。すなわち東南の約1/3が接客部分、西半は家族の生活部分、東北が台所を中心とする使用人の部分である。周囲には、築地(ついに)をめぐるし、四方に門を開くが、東が正面で御成門(おなりもん)と平棟門(ひらむねもん)とがあり、御成門を入ったつきあたりの広間とよばれる建物が、もっとも主要な客用の座敷である。その奥の御成御殿は将軍などの御成りのとき居間、寝室に使われたものであろう。広間の前には能を演ずる舞台とその付属の楽屋があり、南方には茶会のための数寄屋(すきや)と露地(ろじ)とがある。中央にある対面所、御寝所、書院などは主人の生活の場所であり、西北の御上方は夫人のへやであろう。周囲の長屋は家臣の居住するところである。建物は南面し、南に広縁があり、東南に寝殿造中門廊のなごりである中門が突出する(この二つの部分は板の間)。室内は南北2列にわかれ、南の奥が上段(座)の間で、正面に上段を造り、床(とこ)・棚(たな)がつき、南西のすみに付書院、北側に帳台構(かまゑ)をもうけ、その東のへやを次の間とする。北側の奥は納戸(なんど)とよばれ、寝室である。柱は角柱で、周囲の建具には一部廊(しとみ)戸が用いられるが、多くは遺戸(やりどー引違いの板戸)が建てられ、うちに障子をいれる。内部の間仕切は襖(ふすま)で、平安朝以来の伝統により障壁画が描かれ、室内には畳がしきつめられる。他の建物もだいたいこれを基準としている。

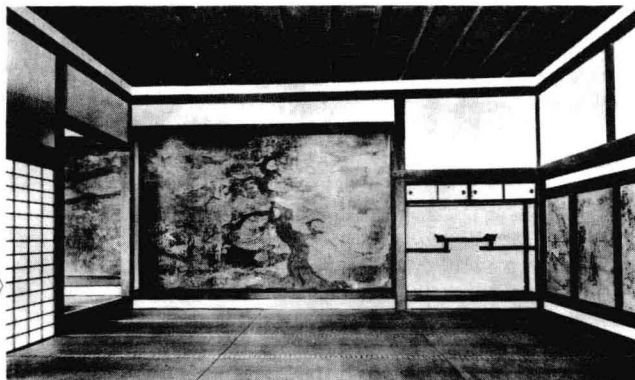
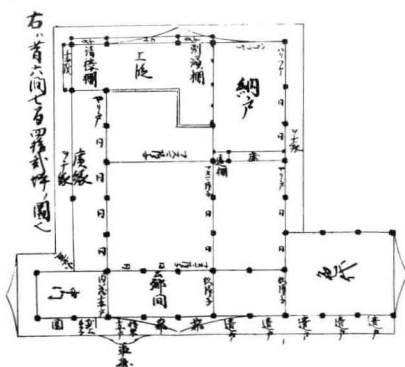
書院造の室内意匠の特色は、床、棚、付書院が主要な座敷の座敷飾として、座

敷の正面にかきの手に造られているところにある。床は室町時代には押板(おしいた)とよばれ、奥行が浅く、間口が広く、厚い板を敷いたものであった。桃山時代のものも多くこれで、現在のような奥行の深いものではなかった。奥行が深くなり、床の間とよばれるようになったのは茶室に始まるらしい。押板は宋・元から掛軸形式の絵が多く輸入され珍重されるにつれて、その鑑賞の場として造られるようになったらしく、その発生は室町中期と考えられる。棚は寝殿造では日用品をおくために二階棚や厨子(ずし)棚を用いていたが、宋・元の工芸品が入ってくると、それを飾るためのものになり、これが作付けになったもので、その時期は押板の発生と相前後するところであらう。付書院は古くは出文机(だしぶつくゑ)とよばれ、机の作付けになったもので、鎌倉時代の絵巻にすでに現われている。しかしこれは主人の書斎にあったもので、主要な広いへやにはなく、私室的な小室に設けられていた。実用的な棚が工芸品を飾る棚に変化したように、付書院も座敷飾の一つに変わっていった。しかし付書院は本来の用途のなごりをみせ、ここに筆、墨などの文房具を飾っていた。室町時代の中ごろには、これらはまだ一つの場所に集められず、別々のことが多かったが、桃山時代には、多くの遺構にみるように、座敷飾の中心として定型化された。平安朝以来の障壁画は桃山時代に入って豪華なものとなり、飾金具、欄間(らんま)彫刻などもいちじるしく発展したが、江戸時代になると幕府の儉約令により豪華な装飾は禁じられ、また飾りのない茶室の室内意匠も影響して、飾りのない簡素なものに変わった。

このようにして成立した書院造は、こんにちまでその伝統を伝え、和風住宅としてなお現在も行われており、遺構としては園城寺光浄院客殿、同勸学院客殿、同円満院寢殿、二条城二の丸殿舎、護国寺月光殿、東寺観智院客殿などが有名である。(太田 博太郎)

しよいんばん 書院番 江戸幕府の職名。小姓組番とともに両番といわれ、将軍の警衛のほか使者の役、儀式の際の将軍の給仕などに小姓組番と交代であった。番頭10人、4千石高、菊間(きくのま)詰、若年寄支配。組頭各1人、千石高、菊間(きくのま)詰。番衆各組50人、3百俵高、1組中の半数は虎(とら)之間を警衛。各組に与力10騎、同心20人が付属、柳間・玄関前・中雀門・番所を警備する。

書院造 左は主殿(広間)の平面図(《匠明》より)。中は園城寺光浄院客殿の上座の間。右は光浄院客殿の平面図。1.床 2.付書院 3.棚 4.帳台構



1605年(慶長10年12月)はじめて番頭4人、4組が置かれたが、のち10組に増設された。1639年(寛永16)からは番組1人ずつ毎年交代で駿府に在番した。1866年(慶応2年12月)廃止されて、奥詰銃隊に編成された。西丸書院番(番頭4人、4組)は1651年(慶安4)の創設である。

(進士 慶幹)

しょう 子葉 管束植物の胚発生で最初につくられる葉をいう。茎の上での位置だけから定義されたものであるから、子葉の数、形、生理学的な機能は種ごとにたいへん違っている。シダ植物では子葉を第1葉ともよぶが、種子植物では子葉のつきに形成される葉を第1葉という。子葉はしばしば、ほかの葉にみられない特異的な性質をもち、系統学的にも発生学的にも重要な意味が認められている。被子植物は子葉の数が一つか二つかによって、単子葉類と双子葉類とに大別されている。しかし、まれにはほとんど子葉が発達しない種(ブナノマンジュウ)や、裸子植物と同じように数枚の子葉をもつ種(ブドウ)も知られている。胚乳種子をつくる植物(カキ、イネ、ムギ)では、子葉はあまり生育しない状態で休眠し、種子の発芽とともに尋常葉によく似た葉に成長することが多いが、無胚乳種子(シイ、クリ、マメ)では、種子形成のとき胚乳の代わりに子葉の内に多量の貯蔵物質が蓄積され、特殊な形と役割がみられる。このような無胚乳種子の形成過程や発芽過程では、子葉内の物質代謝様式が著しい変動をみせ、最近研究が進められている。

→種子 (古谷 雅樹)

しょう 止揚 ドイツ語アウフヘーベン aufheben の訳語。〈揚棄〉とも訳される。ヘーゲル以来、弁証法的〈否定〉の機能の特徴づける論理的術語となった。彼は、この語は、(1)〈保存する〉aufbewahren(erhalten)、(2)〈否定する〉aufhören lassen(ein Ende machen)の2義を有し、形式論理のいう〈抽象的否定〉と異なる〈意識の否定〉、すなわち彼の〈限定された否定〉bestimmte Negationの内容をよく表現するといひ、意識ないし絶対精神はこのような止揚の働きを重ねて発展すると考えた。彼の弁証法論理は絶対的観念論と歴史的發展の存在論を前提したが、通常はこのような前提を離れて、一般に定立反定立の弁証法的総合すなわち事物相互の矛盾対立を動因とする発展において、低い段階の形式にふくまれた内容が新しい高い形式(連関と秩序)のなかに組みこまれて、否定されるとともに保存されることを、ごく大まかに止揚とよぶ。弁証法的唯物論においても、この語は対立物の統一のさいにもちいられる。すなわち、分裂した諸要素が互いに対立し闘争し、内的に浸透しあい、その過程をおして統一され、高度に発展した事態が成立するとき、諸要素が統一のなかに止揚されたといわれる。

(橋本 峰雄)

しょう 仕様 機器を注文し、購入する場合に希望する機器の種々の特性、性能の限界、形、外観、製作上の種々の処置などを詳細に示して、購入のさいに、製作者側に、希望機器の性質、希望の程度を明示するために示されるものをいひ、

これの書かれたものを仕様書、または示方書という。また施設工事などの場合には、工事の規模、使用材料、工事方法、完成後の技術的ならびに外見上の要求なども仕様書によって示される。英語で specificationといわれるものである。

(尾佐竹 衡)

しょう 省 内閣の統轄下における国の行政機関の一つ。各省の設置、廃止ならびに所掌事務の範囲および権限は、別に法律で定められることとなっているが(国家行政組織法第4条)、この規定を受けて、〈大蔵省設置法〉〈外務省設置法〉など各省ごとに設置法が設けられている。明治憲法下においては、行政各部の官制を定めることは、天皇の大権事項であったために(大日本帝国憲法第10条)、各省の設置、廃止、権限などについての定めは、法律の形式によらず、勅令の形式で定められていたが、現行憲法下においては、天皇の大権事項がすべて廃止され、国会が唯一の立法機関として広い権限の推定を受けることとなったのに伴ない、これらの事項も法律の形式で定められることとなった。省の長は大臣とし、この大臣は、内閣法にいう主任の大臣として、各省の行政事務を分担管理する(国家行政組織法第5条第1項)。大臣の下には、特別職たる政務次官1人または2人、一般職たる事務次官1人を置いて、大臣の職務を補佐せしめることとしている(同法17条1項、2項、17条の2第1項)。省には、その所掌事務を遂行するため、官房、局、部、課、室などの内部部局が設けられ(同法7条)、委員会および庁が外局として設けられる(同法3条3項)。また、法律の定める所掌事務の範囲内で、とくに必要がある場合には、法律の定めるところにより、審議会または協議会および試験所、研究所、文教施設、医療施設その他の機関を置くことができる(同法8条1項)。また、その所掌事務を分掌させる必要がある場合においては、法律の定めるところにより、地方支分部局を置くことができる(同法9条)。1980年現在、〈国家行政組織法〉のもとに存在する省は法務省、外務省、大蔵省、文部省、厚生省、農林水産省、通商産業省、運輸省、郵政省、労働省、建設省、自治省あわせて12省である。(成田 頼明)

しょう 省 中国の地方行政区画の名称。漢の州、唐の道、宋の路に相当する大政区で、元代にはじまり現在もなお用いられている。省とは行省(こうしょう)、さらにくわしくいえば行中書省のことで、蒙古帝国が中国を占領するに従って、臨時に中央の中書省から官吏を派遣して占領地域を統治したのでこの名称が生じた。これは金代に行台尚書省をまねたもので、はじめは主として軍事機関であったが、揚子江以南の地域が平定されると、民政をもつかさどることになり、一定の行政区画をもつ経常の独立官庁になった。そして江南の諸省の成立に応じて江北でも行政区画の再編成がおこなわれ行省が設置された。13世紀末(クビライ・カンの晩年)には国都(今の北京)の中書省のほか、河南・陝西・四川・甘肅・遼陽・江浙・江西・湖広・雲南の9行省があり、その後蒙古に嶺北行省が増置された。行

省の長官を平章政事といった。明代の初めには国都(今の南京)を中心とする地区を直隸として中央の直轄下におき、全国を北平・山東・河南・山西・陝西・江西・湖広・四川・浙江・福建・広東・広西の12省に分けたが、その後雲南・貴州を加え、また北京遷都にもなつて北平を直隸、旧直隸を南直隸と改めた。省の行政長官を布政使といい、別に監察をつかさどる按察使と軍政をつかさどる都指揮使があったが、中期以後は督撫がこの3者をすべる実を備えるようになり、清代にひきつがれた。清代では南直隸が江南と改称、ついで江蘇と安徽の2省に分けられ、同時に陝西も陝西・甘肅に、湖広も湖北・湖南に分割され、ここにいわゆる本部18省が成立した。このほか東三省と新疆省があったが、内地とは統治方式を異にした。民国では周辺部の中央化が進行し、ついに本部18省(直隸を河北と改称)に遼寧・吉林・黒竜江・熱河・察哈爾・綏遠・寧夏・青海・西康・新疆の10省をあわせて28省制をとるにいたった。人民共和国になってからも省の分合がくりかえされたが、1980年現在、河北・山西・遼寧・吉林・黒竜江・陝西・甘肅・青海・山東・江蘇・安徽・浙江・福建・河南・湖北・湖南・江西・広東・四川・貴州・雲南の21省と〈未解放〉の台湾省があり、省の長官を省長という。なお省と同格の少数民族の自治区には、内蒙古自治区、新疆ウイグル自治区、広西チワン族自治区、寧夏回族自治区、チベット自治区があり、その長官を主席という。このほか北京、上海、天津は省と同格の直轄市になっている。→行省 (森 鹿三)

しょう 商 ⇨殷(いん)

しょう 商 Shang 中国陝西省南東部の町。県政府所在地。西安の南東約90km、秦嶺の南斜面、漢江の支流丹江の上流にあり、古くから渭水盆地防衛の要地である。西安から河南・湖北への通路にあたる。林業、鉱業資源が豊富であり、また、付近に産するアイ・米・小麦・コーリャンを集散する。この地方は中国でも早く開けたところで、春秋時代にすでに晋の上洛邑(ゆう)が置かれた。隋・唐以後の商州の地で、商州とも呼ばれる。民国になり1913年に商県と改め今日にいたる。(海野 一隆)

しょう 章 中国における文体の一種。ふるくは臣下が天子にたいしていろいろな事柄を表明するためにたてまつった文をすべて〈上書〉といったが、漢代には、これに章・表・奏・議の区別が生じた。このうち孔融(153~208)の《大中大夫を謝する章》にはじまるといわれる〈章〉は、当時、もっぱら謝恩の気持をあらわすために用いられたが、のちには、論諫(ろんかん)・陳請・慶賀などにわたって、他の体との区別を失い、やがて唐以後になって、その名称はほろんだ。

(高木 正一)

しょう 笙 中国、朝鮮および日本の古代楽器。

〔中国・朝鮮〕中国本来の笙の構造は匏(ふくべー瓢箪(ひょうたん)の一種)を壺(こー風箱)とし、13~36本の長短の竹管をさし込み、管の下端に金属製の簧(し

日本の笙

